

保 存 用
永 久 保 存

る・く・る

COLOR

12

東京都立松原高等学校

	No. S - 65
東京都立松原高等学校図書館	

巻 頭 言

学 校 長 井 上 速 雄

論文にしても、創作にしても、他人の書いたものを読む時はそれにひそむ苦勞は分らないが、いざ自分が書く時にはなかなか苦心の多いことを感ずる。しかし民主主義の社会には演説や印刷等の方法でお互が自分の考えを正しく発表するように熟達することが大切になる。また反対に他人の考えを正しく理解する必要なことも言うまでもないことである。

このような意味でわが校において、毎年ル・クールが発行されて来たと考ええる。年一回の発行とは少しさびしいことであるが、おそらく費用の点から来ているのであろうか、そればかりではないであろう。生徒諸君はどうか自己の随筆や創作、論文をどしどし投稿して編集者を困らせる位になって貰いたい。ル・クールにのせて意見や批判を聞くことはひいては自己の成長ともなり、他人への刺激ともなる。本校のル・クールを読んで見て感ずることは他校の同種の雑誌に比べて水準の低いものとは思わないし、努力すればまだまだ大いに伸びる素地をもち大いに期待出来るものがある。

生徒諸君例え発行回数が少くても、三年間の在学中に一回でも寄稿し自分の作品を発表する心掛が欲しい、三年いたが何も足跡をとどめないのでは日々考えることなく、反省もまとまりのない高校生活であると云われても仕方がないだろう。

しかし、ル・クールの内容は私あくまでも真面目な気品の高い公正なものがあることを望む。少くとも今迄はそのよう

であつたように信ずる。この種の雑誌や新聞には、そうでないものは多々見うけるのは残念であるよく唯我独学的な、自分だけが正しいという偏見で、他をのりし、実践的な経験もなく、他人のうけうりそのまま公式論でまくしたてるものがある悪口だけでおさめえず、肉体的な特色からのあだ名をあげて揶揄する記事にいたっては言語どうだん愚劣極まるというより外はない。他を悪く言つて攻撃しても、自分の考えが直ちに正しいものになるものでもないし、また秀れたものになるものでもない。三文新聞のような論説や記事をのせることが、言論の自由ではない。このような他を毒し、あやまらせるものにはきびしく批判し排除されるべきである。

われわれは何事につけても、慎重で、謙虚で、見聞広く、紳士的に、正しく、美しくありたい。

ル・クールにも同様のことを切望してやまない。

目次

詩	巻頭言	校長	井上	連雄
てんとう虫の恋		二年	和田	良子 1
赤ちやん		一年	吉田	昌雄 4
あの娘は今どこに		一年	吉田	昌雄 4
山に撞れて		一年	吉田	昌雄 4
若さ				5
さすらい				6
別離				6
追憶				6
生きる条件		一年	大野	茂広 7
希望		一年	佐藤	昇 8
カンニングから		三年	遠藤	邦夫 9
僕は今日もしあわせ		三年	狩野	秀夫 15
ブラットホーム		一年	坪井	良子 16
美しヶ原にて		三年	青木	滯子 16
私の心		二年	村上	憲吾 18
すい想、体験				
今様奥の細道		三年	鈴木	国彦 20
高校に入つて考えた事		一年	大野	茂広 26



ある日ある所で	一年	須長玲子	32
最高の想い出	三年	滝口和成	34
ソフト野球友達	三年	細山正美	36
想　　う　　事　　ち	三年	大西修子	39
徒然なるがゆえに	一年	青木溺子	40
ある日の思い出	一年	大沢則夫	43
僕の考え	三年	加藤寿子	44
夜の随想	一年	狩野秀夫	45
一番幸福な奴	一年	加藤寿子	46
名　　優	一年	大堀晴哲	47
俳　　句	一年	山崎朱実	50
短　　歌	一年	山崎朱実	55
クラブ報告	三年	井出三郎	55
化学部	一年	山崎朱実	55
社　　研　　部	一年	山崎朱実	55
ザ・ブルーナイト	一年	山崎朱実	55
山　　岳　　部	一年	山崎朱実	55
美術部	一年	山崎朱実	55
得難い経験	生徒会長	中野泰之	64
編集後記			68



天道虫の恋

二年 和田良子

サファアア色した 大きな空は
きれいに晴れておりました

取って、ちぎって、食べたいよ
うな

真白い雲がボツンと一つ
静かに遊んでおりました。

広くて緑い原っぱが
お空の下にありました。

とがった細い露の葉に
てんとう虫がおりました。

黒地に赤の斑点の

てんとう虫は言いました。

「なんて綺麗な虫だろう。

サファアア色に綺麗に晴れた

今日のお空のような羽
レモン色した水玉だ。
それにひきかえ僕なんて
黒地に赤の斑点だ。」

レモン色したてんとう虫は
小さな 綺麗な詩の本を
すまして読んでおりました。

お鼻の上に黒ブチの
メガネがのつておりました。
ソフトに燃える太陽の
一つの光に黒ブチが
キラキラ光っておりました。

黒地に赤のてんとう虫は
じっと黙って見ておりました
レモン色したてんとう虫は、
しばらく経って本を閉じ
小さな吐息をつきました。

黒地に赤のてんとう虫は
瞳をきらり光とらせました

レモン色したてんとう虫は
小さな胸に詩の本を
そっとかかえて ぼんやりと
お空を眺めておりました。

夢幻に燃えたてんとう虫の
瞳は彼を見つけてました。

レモン色したてんとう虫は
うっとりそっとつぶやきました
「何んて貴方はステキでしょう
虹のお城の騎士のような
貴方は何んてステキでしょう。」

黒地に赤のてんとう虫は
小さな瞳をパチパチと
はにかみ照れて微笑んで
自分の姿を見直しました。

レモン色したてんとう虫と
黒地に赤のてんとう虫は
露のかかった草の葉の
小さな根っこに腰掛けました

お腹に小さな六本の
足をすらせて喜びました。

レモン色したてんとう虫は
伊達のメガネの黒縁を
時々小指であげながら
詩集のナイトのお話を
夢中で続けておりました。

どこから来たやら判らない
かすかな風が 柔らかに
緑の草をなでた時
一つの小さな雫の粒が
黒縁メガネに落ちました。
黄色した夢想の幕は
静かに輝く太陽の
光の使者に破られました。

レモン色したてんとう虫の
黒縁メガネの瞳には
歓喜に満ちた小っぱけな
黒地に赤のてんとう虫が
みじめに映っておりました。

レモン色したてんとう虫は
さっき読んでた詩の本の
騎士の話を語りました。

黒地に赤のてんとう虫は
彼女の輝く瞳の中の
甘美な香りに酔いました。

彼女の話は情熱的で
黒地に赤のてんとう虫の
小さなハートはそのため
すっかり躍動しておりました。

レモン色したてんとう虫と
黒地に赤のてんとう虫の
頬は歓喜に燃えました。

黒と赤とレモン色と
サファイア色は混淆し
二つの心は一つになって
黄色した夢想の中で
楽しく踊っておりました。

黒地に赤のてんとう虫は

レモン色したてんとう虫は
自分がどうしてこのような
黒地に赤のてんとう虫と
根っこに座って話しているか
訳がわからず考えました。

黒地に赤のてんとう虫は
レモン色したてんとう虫が
どうして急に黙りこみ
自分をジットみつめるか
わけがわからず小さな首を
コクンと斜めに傾けて
自分を、も一度考えました。

「そうだ。やっぱり僕なのだ。
黒地に赤の僕なのだ。」

黒地に赤のてんとう虫が、
レモン色したてんとう虫の
相手になれる訳がない。

やっぱり僕は僕なのだ。」

黒地に赤のてんとう虫の

小なさ瞳に露のよな
涙が浮んでおりました。

瞳に浮んだ一粒の
涙が頬を伝つたって
地面にボツリと落ちました。

サファイア色した大きな空は
奇麗に晴れておりました。

とってちぎって食べたいような。
真白い雲がボツンと一つ
静かに浮んでおりました。

赤ちゃん

一年 吉田昌雄

かわいい赤ちゃん。
あどけなく光るあなたの瞳は
生きる喜びで一杯です。
あなたには未来があります。
あなたが貧しく生まれても、
あなたがニグロであろうとも、

みんな同じ赤ちゃんなのです。
ただ生まれた喜びに
胸をはずませる
赤ちゃんなんです。
みんなみんな
同じ赤ちゃんなのです。

あの娘はいまどこに

一年 吉田昌雄

ああ。あの娘はいまどこに。
楽しく遊んだあの夢も、
励まし学んだあの学舎も
みんなみんな遠い夢、
夕日があの娘の背を紅に染めて
あの娘は静かに去って行った
寂しく見送る僕を後に
ああ。あの娘はいまどこに。

山に憧れて

一年 吉田昌雄

山のあなたの空遠く

幸い住むと人の言う
あゝ我人とめゆきて
涙さしぐみかえりきぬ
山のあなたのなお遠く
幸い住むと人の言う

僕がこの詩を読んでから、もう五年以上経つ。この詩に何となく
感動して、初めて山に登ったのだから僕の山歴も五年以上経って
いる事になる。この五年間奥多摩の山々を暇にまかせては金の続くか
ぎり登った。そして僕は多くの事を山から知らされた。山の厳し
さ、楽しさは勿論、山の寂しさ等もみつけ出した。

ある時は道に迷い真夜中に山を出、ある時は水がなくなり、死ぬ
思いで水場を探した。そんな恐ろしい思い出の中で、いつも僕の胸を
飾ってくれるのは、キャンプファイヤーの一時だ。山に囲まれた静
かな夜。星もたくさん光っている。

こんな夜紅く高く燃える火を囲んで、みんな歌い合う。この山で
新しく結ばれた友達と、食い残りのお菓子等を集めて、又どこかで
会える日を期待して歌い合うのだ。

それから僕は昨年の夏、新潟県の妙高山でキャンプをした時、暮
れ行く白馬、遠く志賀高原まで見わたせる広大な視野の中で僕は山
々のあまりにも雄大な、そして驚異的な姿に一種の恐怖を感じた。

翌日早朝僕は太陽が山から登ってくるのを見た。まだ麓の家々の
光か点々としつかつていない頃だ。太陽の出る所がより明るく、山
の中腹から頭をニユッと出す。とても雲海がきれいだった。昨晚見た山

々も今は美しくその姿をさらけ出している。この様に山をいつも違
った美しさを僕達に見せてくれる。でも山は、ある日突然猛魔と化
する。そんな時多くの尊い人命をうばってしまう。あの美しい富士
山でさえ十数人という尊い人命をうばっている。
山の美しさだけに憧れている多くの人は、「山で死ねれば本望
だ」なんて浅はかな言い方をする。僕はそんな考え方には大反対
だ。もし君が本当に山を愛しているのなら、山をいつまでも永久に
美しく保つていこうと願うならば。

あなたが山で死ねばあなたはそれで良いかもしれない。しかし残
りの山を愛している人はどんな気持ちでその山に登るだろうか。そ
してあなたの両親はあなたを捜索する為に何万円という無駄な金を
使わなければならない。「山で死ねれば本望だ。」なんて言っている
人はこんな事を考えているのだろうか？

僕は山を愛する一族として声を大にして呼びかけた。「山よ
永遠に美しくあれ！」と。

「若々」

落さこれは俺達だけのものだ
どんな金持ちでも
どんな権力者でも
それを手にいれることはできない
若さ、ほとばしる血潮
果てしなき夢

もえあがる野心

これをおさえることはできない

自分を非凡と思わない奴は

青年ではない

そこには無限の可能性がある

空をみろ海をみろ奴らは俺達の

挑戦をまっける

山をみろ大地をみろ奴らは

俺達をあざけっている

今にみろ

お前らをひざまづかしてやる

きつと

「さすらい」

われ一人何を求め

荒野の果てをさすらはむ

真実永遠の愛

それはどこにあるのだろう

あのはるかにそびえ立つ山のかなたに

いけどもいけども一人身の悲しさ

に野分の風がなを身にしみる

夜空に輝く星一つ我と同じ

いつこのはてないさすらいが終るのか

きょうもさすらいの旅に行く

「別離」

雨の街頭の下でさようならを言った

君は何も言わずうつむいていた

はつれ毛がほおにたれ

瞳はうるんでいたね

僕は軽く唇をあて

逃げるように去っていった

コートのを立てあとをみずに

ほのかな光に映しだされた雨は

君の涙のようだった

今僕はあてのない旅に立つ

君の想いを秘めて

もう二度と会わないだろう

でも

いつもどこかでみまもっている

どこかできつと

「追憶」

夜がくる さみしい夜が

広い荒野に俺一人

野分のさむさはつらくはないが

一人ぼっちのさみしさが

心にしみる

すぎ去った追憶が

うかんでは又消える

俺は過去にしか生きられたいのか

心のやすらぎはどこにあるのか

いつになったら幸福に

めぐり会えるのか

今日も夜がくる

さみしい夜が

生きる条件

一年 大野 茂 廣

新しく芽ぶく高校生

大人にはいる時

その思考は未来に躍動し

慌冷たる平原を地平線の朝日に向

い

ある時は 雷になぐられ

風雨にみとばされ

泥濘に足をすくわれながら

限りなく前進する。人間像！

この出発点が高校生なのであり

又、そうあるべきなのだ！

やがて朝日をこの我々のたくまし

い手で謳歌する時にも……

ところで現在社会に生きる条件が

与えられているだろうか？

昨年——

採掘夫しか必要としない資本の保

安無視の為に、四百五十八名が死

んだ。

労相曰く、

“そのような事は事実である。

しかし、現状ではやむを得ない”

と。

四百五十八名を殺した保安無視を

“やむをえない”と。

この事故で遺家族に七十万円人

命一人七十万円

結局、利潤しか頭にない資本家は

高い保安設備をやるよりも、七

十万円の方が安く上がるという。

この、人間より利潤が重視される

社会で

生きる条件が浸されている現実を
我々は知らなければならない。

広島におちた二、三百倍の水爆を
持つF105Dサンダーチーフが東京
の横田基地に置かれ、常に頭上を
飛んでいる現実を

横須賀に原子力兵器であるサブロ
ックを積載しているボラリス潜水
艦が、来ようとしている現実を

小さくは、正月早々貧困による
一家心中をした家族がある現実を

我々は知らなければならない。

この浸された生きる条件を！
政治的条件を！
経済的条件を！

我々の手で固く結ばれた
鉄の腕で長く巨大な鎖を作り、
いかなる弾圧が来ようとくじけな

雲間に見た淡い水色。

なにときれいだろう。

たとえようがない程、美しいでは
ないか。

広がる。

水色の空が広がる。

水溜りの中に。

下を向いて歩いていた人が、お

どろいて空を見上げる。

まぶしそうに。

その顔にかがやきの色が広がる。

空がだんだん深くなっていく。

“カンニングから……”

三年 遠藤 邦夫

緊張で張りつめた冬の朝

今は国語のテストの時間

ガサツ／＼ガサツ／＼

急に、虫が紙の上を歩いているような音がする。

俺は答案を書き終えた。

い。

“団結の力”で

真の生きる条件を形造り

育てなければならぬ。

そこにはじめて本当の平和がある。

希望

一年 佐藤 昇

雲は動かない。

だが雲は動いている。

僕の居る方に。

僕の上におおいかぶさるように。

いやな雨雲だ。

雲の形がくずれる。

下の方に手がのびてくる。

なんと変な形の動物だろう。

動いてくる。

こちらに向って。

切れた。

雲が切れた。

テスト用紙をめんどくさく

思いながらみなおして、ふと

その音に耳をかたむけた。

虫だろうか。いや、違う。

あの音は、虫がたてる音ではな

い。虫ならば、一年の四季が、

彼の動作に変化を与えるはず。

しかし、あの音は一年を通して

全然かわらない音だ。

よしんばかわったというなら、

始めガサツという音がして、

しばらくは、心の責苦にたえるが

ごとく音がたえた。

しかし、今は違う。

あのガサツという音は、たとえ試

験官が、いようが、いまいが何の

躊躇もなく、すみやかに、一定の

テンポをとまって踊りだす。そ

の音、カンニング・ペーパーのす

りあう音だ。

今始業より二十分。

又、どこかで音がする……

「バカヤロー」

一瞬、俺は教室の窓ガラスが、

割れて、こっぱみじんになる程、怒鳴りたかった。

俺は考える。

カンニングしている奴の事を、そしてカンニングまで行かなくとも、時にその行為にたよりたいたいという俺の卑怯な、そして弱い心の事も……。

カンニングをしている友よ

何故、君はカンニングをするのだ？ 何故、君はカンニングまでして点を上げたいのだ？

何故、君はカンニングまでしなければならなくなったのか？……カンニングは君の心を裏切る行為だ。カンニングは君を馬鹿者にする。そんな事を知らない君ではないはずだ。

しかし、今の君の心は、若く強い体にそぐわず、まるで暗く、じめじめした中で、もがき、苦しんでいる。今にも死にかかっている病人のようだ。

しかし、考えてくれ
神が人間を生んだのでは、
けっしてない。

人間が神を生んだのだ！

人間が現在のごとく振舞っていない
かった。ずっと／＼前。

人間は、自然の恐怖心から、身の精神的な安らぎを求めた。抽象的で、純粹で、そして何よりも全能なるものを、何かの形で描きたかった。

心の安らぎを欲しかった。

それが神だ！

そして、たとえ神は全能なりとも人間の造ったものだ。

人間は、この事に強い誇りを、もつべきだ。何故なら、原始の世から現世まで、人間が人間の到達する最高のものとして、めざしたからだ。

人間は神になりえると！

だが、しかし人間の或る者は、少し焦りすぎた。

人間が、一代や二代、千年、二千

君は、君自身を殺したいのか！
殺してはいけない。

君の誠実な、人間味豊かな心を、そして、たくましい体を。

健全な体と健全な精神を君は必要としないというのか？

いや、君は必要とする。

何故なら君は人間の子だから。

それにしても俺の心は何だ！

人の事をいうくせに、自分はあの憎むべき行為を欲する心を持っているのだ。……

何！

人間は神ではないって！

あたり前だ。

君等がいうような神などいっこないもの。或る人間はいう。

全能なるもの＝神と。

そして、神が人間を生みたもうた
と。……

もし、そのようなものが存在するならば、俺は神になりえない。何故なら俺は人間だから。

年の人間の歴史に全能な人間の現出をみいだせなかったと知ると、彼等は、人の世を、うれい、神というものの概念を、人間という生きた動物から死んでいる何者かのもっていった。或る者は、宇宙に求め、或る者は、地球の中心に求め、そして、又或る者は、人間の知らない、いろ／＼の物質の中に或は、幻想の中にもっていつてしまった。

そして、彼等は人間の多数をまどわしつづけた。……

しかし、真の神がまだ存在するなら、つまり、人間自身の最高の到達点と規定した全能なる神が、まだ存在するならば、俺は神になりえる！

いや、全ての人間が！

一步／＼近づくことだけでも、

それは、何万年、何億年、何兆年先かわからない。

しかし、それでも人間は、人間の作った全能なる神となりえる。

そして俺も……。

その俺がたとえカンニングの様なものでも、悪いと知ったなら、その氣持をすてたいと思うのは、ごく自然の事だ

正しく、力強く生きる事を望む人間の造った全能なる神への、人間の正しい歴史の流れに、たとえ小さな悪い事でも、それを直していかねば、人間の歴史の、たとえ一部でも支障をきたすのだ。

そして、その事は、人間の神、一步／＼人間社会を正しく、強く、経済的にも、精神的にも発展させていく人間の歴史への反動だ。

そして、人間の歴史をこわしてしまいかねない。

俺は自身に、そして俺の友に強く叫びたい。

人間の歴史を反動化へ進める事は今すぐきめよう。

人間社会を支配する一部の反動家

やめよう。

現在のおかしな社会も、過去のけがらわしい数々の事件の影響によったという事を忘れてはなるまい。

「過去は二度と繰り返すな」！
未来へ進む我々の、この言葉が人間の勝利の合い言葉だ。

我々若い仲間の合い言葉だ。

そして、歴史の正しい道を進む全ての人間の合い言葉でもある。

人間の歴史は偉大な道だ！

そして、偉大な人間へと進む道だ！

俺はこの事を人間の歴史から学んだ、そして、偉大な人間に近づこう、近づこうと欲すれば小さな事も、悪いことならば直していかねばならない。

又、音がした！

又、やったな友よ。

何とあわれなやつだ、君は。

俺はもう自分の事をあわれんでは

と行動を共にするな。

もし奴等と行動を共にするとういうならそれは、自分自身を精神的、肉体的に殺してしまう事だ。

人間の歴史を一步でも正しい社会に進ませなければならないのに、俺達はそれを妨害しようというのか。自から死ぬことを欲するののか。全人類を滅亡させるのか。

そんな怖い事を欲するのか。いや、俺達には、そんな事は、出来ない。

まだ俺達には、人間としての尊厳と誇りを持っているもの。

だからこそ、俺達は、たとえ小さなカンニングの事でも、

それが悪い事でも、

それが悪い事であるなら、

人間社会の歴史を反動化への助長をうながすなら、俺達は少しでも

いいから直さねばならない。

人類の未来への現在をけがすのは、

いないぞ。

カンニングが悪い事であり、やれば人間失格になるという事をしたからな。

そしてその小さな事でも究極は何よりも人間の歴史に反する怖い事と知ったから、

そして、人間の歴史は真理であり正義であるという事を知ったから。

君は、人間の歴史にはむかうというのか。

おかしくって／＼

笑わずにはいられないよ。

君のやっている冒険は全く無意味なものだ。

君のやる冒険は、時代遅れだ。カンニングを直そうとしない

君など人間は必要としないのだ。

現在にまでも人間社会を発展させた。そして、一步／＼ではあるが

全能なる人間にむかわせしめた偉大な人間の歴史は地底から、

天上から、

大海原から未来の人間の進む

指針を示してくれる。

それは、ギリシヤやローマの人間の声であり、又昨日死んだ俺達の親父やオフクロや兄弟、姉妹の声なのだ。

その人間達が君を見たら、カンラカラ／＼と嘲笑するであろう。「何て無意味な事をやっているのか、あわれな人間だ。」

人類と縁を断った孤独の人間。明るい未来の人間社会を真つこうからみる事の出来ない人間。

人類と喜びも悲しみも一諸に味わえない人間。全くあわれな奴だよ。あいつは」……………

後十分で鐘がある。

君はもう分ったろう。

君のやっている事の無意味さを、そして悪い事を。

俺は分ったぞ！

君はまだ分らないって、

はーん、君が分らないって、

強情張っている意味が分かったよ。

恥かしがっているんだな、君は。分った、もう恥かしがる事はないんだ。

過去のやった事が悪い事、無意味な事、人類にタテつく恐ろしい事としたなら、二度とやらないように改めればいいではないか。

「過去は二度と繰返えすな」

これが俺達の合い言葉だっけな。もう本当に分っただろう。

分ったって、本当か。

やっと分ってくれたね。

俺は嬉しい。

だって、君も俺も人間の正しい社会を作る為に一諸と闘ってけるもの。

そして、なによりも君と真の友になれるんだもの。

テスト終了の鐘がなる。

カラン／＼／＼

いつもこの鐘の音はテストの

終了で心の安らぎを与えてくれた。

しかし、今の鐘はそれ以上の響きがあった。

僕は今日も幸せ

三年 狩野秀夫

僕は今日も幸せ、

夢と自由が何時もあるから、

夢は僕に自分の道を与えてくれる

自由は僕に自分の世界を与えてくれる。

自分の世界に居て自分の道を生く

この道が何処まで続くか、

それは知らない。

でもこの道を歩いて居る時、僕は

幸せなのだ。

嵐が来ようと地震に会おうと

僕は負けない、前進するぜ。

一日一歩でも前進出来ればそれで

僕は幸せ。

石の壁が行手を遮ろうとも僕はぶ

つかるつるはしを持って例え身が

砕けても僕はやる、ぶち破ってや

るぜ何時の日か。

あきらめ……それは僕の世界から



ものとする為に！

それは、未来の明るい人間の社会をつくる俺達の前途を祝してくれる鐘の音だった。

さあ、今日から勉強しようぜ、カンニングなんてしなくてもすむよう、学校の勉強もやろう。そして、それ以上になによりも大事な正しい人間の勉強をしようぜ。

さあ、もう教室から出よう。こんな人息れのむん／＼した室から、そして、明るく輝く太陽の照っている外にでて、新しい社会への出発をしようぜ。

明日を俺達人間の

死ぬ事だ前進、僕にはこれしかない、今日も僕は前進している、だから僕は幸せ。

プラットホーム

一年 坪井良子

今、電車が行ったばかりであろうか、ホームはただ静けさだけで冷たいコンクリートをみせている。人が一人来た。続いて、黄色、赤、白、青の服を着た人達がコンクリートの舞台に登場してきた。人々が動いて、まるで風に花がゆれているようだ。しかし、それもつかの間レールの彼方にあつた黒点がだんだん大きくなって突然、私の視界から、いふとどりの良彩をうばってしまった。10秒過ぎ、20秒……、40秒……、電車が去った後に私の見たものは

道を隠し、

日を隠し、

彼方の山脈を隠した。

霧の中を歩いてみた。
マツ毛に水滴がついて
泣いているみたいだった。
髪がぐつしより濡れて
洗ったみたいだった。
セーターに水滴がついて、
しつとりと濡れた。

(二)

晴れた日の美ヶ原に
さいの川原の小石が
行列していた。
マツムシ草の薄紫色が
風におじぎをしていた。
山いちこの白が、
風を一増冷たくした。
名を知らぬ草に
真赤な丸い実が熟れていた、
霧のある日。

もとの冷たいコンクリートと静けさであつた。

美ヶ原にて

三年 青木滯子

(一)

霧は流れていた。
冷たい風と一緒に
ゆっくりと流れていた。
見る見る内に
草を隠し、
花を隠し、
木を隠し、
谷を隠した。
彼方の山脈を隠した。
霧は飛んでいた。
冷たい風と一緒に
ぶゅん、ぶゅんと音をたてて
見る見る内に
石を隠し、
土を隠し、

花も葉もない樹を
帰り道の手掛りとして、
霧の中を歩いていった。
“今はつつじの頃じゃないけど
つつじの頃はきれいだよ。
山の斜面が真赤で燃えてるみたい
に”
“つつじの木が山膚を緑にしていた。
つつじの木には葉があつた。

“十月になるとね、雪が降り出して
すっかり雪の中に埋ってしまっ
んだよ。
銀世界ってあゝ云うんだろうね。
ここの樹木はね、樹の中迄氷つち
やあんだよ、樹の上側だけじゃな
くって”
樹木の写真を見た。
青い空に白い模様が
水彩画に見えた。

雨の日、
私は山を降りました。
雨は横なぐりに吹いた。

“雨は上から降るものだけじゃあ
ない。”

雨は横から吹きつけるよ。
山ではね”
スッポリかぶったビニールが
こんなに重たかった。
雨でビシビシに濡れた靴が
私の足を血豆だらけにした。

美ヶ原は素晴しかった。
霧に映った影、
草をはんでいた牛や馬、
マツムシ草や山いちご、
みんな素晴しかった。
みんな美しかった。

私の心

二年 村上憲吾

君に問う。君の心を。
私に対する君の気持を。
私は待った。だが、
君の影はなかった。

それだけで私は誤解をとく。
君の姿を見なかった私は。
私は君の誠意を感じた。

君のたよりを見つけた時、
私は内容を知った。
今日会えなかったその理由を
君はしたためたのだろうと。

君のたよりを読んだ時、
私は知った。そして失望した。
これから、その後も、
我々は会えない事を
私は失望した。

忘れない、君の事は
君と私の事は。
いままで、私たちは、
一度も会っていなかったのだ。
忘れよう、君のおもかげを
君の示した君の誠意も。
君は私を
忘れようとしていようか。
私は忘れよう。

君の考えも知らず、
私は一人だった。

君に聞こう君の想い出を、
君が考えている君の幸福。
君の行動は君のだけと思い、
その被害をかえりみぬ君に

君に話してもらいたい、
君のよろこびを。

君のいちばん楽しかった時は、
君の今とどう違うのだろう。

君に聞いてもらおう、
私の心を。

私は君に誠意をつくした。
私は君から何も望まない。

君は返事を出した。
ただ了解を求めるのみの返事。
私はそれを知らずに家を出た。
返事はおそすぎた。

君のたよりは受けとった。

出来るだろうか、
君を忘れる事が。

君の、あのやさしい瞳の色を
私が忘れられるだろうか。

忘れる、私は君を、
悲しみをわすれるため
静かな気持ちになりたいために
何もかも私は忘れる。

出来ない、君を忘れる事。
思い出す。君の姿を。
次々と浮ぶ、君の笑顔が、
君を忘れる事は出来ない。

私を忘れない、
だが忘れられない、
心の中にいる君を。
私は忘れられない。

私は想い出す。
あの時の君の笑顔。
会えなくなる前の年は
日ごと君のまなざしは
私に向けられた。

私は忘れない。
このまま、どうなるうとも
私の若い日の記念として、
私は心の中に
だいにしまっておこう。

今様奥のほそ道

三年 鈴木国彦

この悪文は二年の時悪友土屋と、二週間程奥のほそ道を、自転車
で旅行した時の記録である。三年間の思い出として一番記憶に残る
ことなので、悪筆をふるうことにする。後輩諸君も、ぜひ、一度は
自転車旅行をされることをおすすめする。さて、ものは順序とい
いますからまずは計画の楽屋話から申しましょう。そもそもこの楽
屋、現代版、ドサ回り田舎芝居のそれといったようにひどいもの、
成功したのが、不思議ではない。まず第一に、日程がでたら

ばらく行くと左手一帯に美しい沼が見えてきた。牛久沼だ。ペダル
を踏みながら二人ともその夕映えの美しさに、しばし、我を忘れる
思い。

牛久沼をすぎると、あとはもう、唯、単調な国道があるだけ、日
射はもうかなり弱い。さあ、こうなると弱い。なにせ少しの金はあ
るものの、そこは、それ、無計画のたたり、 TENT がない。えいま
まよ、あたってください。国道沿いのお寺、浄土宗浄真寺に一夜
の宿をこい願う。やっと出て来た住職の御慈悲で、どうやら初日
は無事屋根の下に寝られる。しかもこの寺は偶然にも、我らの先輩
二人が、青森までのサイクリングのおりに泊った寺だ、我々が泊ま
れたのも実は、その為なのだ。アア先輩とは良きものかな。とに
かく部屋に入るや否や、すぐに飯を食う。食べすぎてベルトをゆる
めていると、住職が入って来て雑談に花が咲く。この人なかなかの
博学とみて、中村元とかいう人の論文を批判したときに、氏から
全くごもつもの返事が来たそう。事実、般若思想、無常観、過
現未思想等の持論は、なかなか大したもの、我々現代っ子も賛じ
るところがある程だ。まあそのことは別の頃にゆずるとしてねむい
眼をこすりこすり、十一時過ぎまで話しこむ。

二日目 川尻橋

十分に朝食をいただいて、八時出発。蚊にせめられて、よく寝られ
なかった昨夜だが、一夜のねむりは効あるもので、午前中真に快
調なペース。十一時水戸に着き昼飯をとり、後輪のスポークを補う。
それからいけない。午後に入って、まず原子力研究所に立ち寄っ
たのがいけなかった。せつかく近くまで来たのだからというわけ

め、旅費は0といった、無鉄砲きわまるもの、全く今考えれば、恐
ろしくて、寒気がする。それに、そのでたらめな計画でさえ、当日
になって、なかで、この旅行は始ったわけなのです。日記の記録を
紐といてさあ「今様奥のほそ道」の始まり、

初日（八月十日）

三時十分の急行「八甲田」の予定だったが、馬鹿にした国鉄の規
則——サイクリング車ならチャッキで送れるが実用車はだめ——の為
やむを得ず、計画を断念して、（というよりは、無計画になって）そ
の場で決めた、行ける所まで……という極めて性にあった、旅行と
なる。さあこうなると第一日目からペダルを踏まなければならない
わけだから、大変だ、とにかく国道六号線を行こうということにし
たのだが、その道順が分らない、地図といえは、大まかな道路地図
一枚だけ、とうてい都内のことなど分るはずがなく、アチコチこぎ
回るのだがすでに時計は一時を回っている。交番で聞いてもラチが
あかず、ヤット浅草警察でラチがあき一息入れて、いわれたとうり
に取手行きのバスのあとについて行く。それでも地下鉄工事でうる
さい都心をぬけて一步緑豊の続く郊外に出ると、なんともいえない
気分になる。しかも天気は良し、少しこぎとすぐにアセをかく。始
めてはくGパンの足は、もうアセでベタベタだ。二人とも歩行中は
一切口をきかない。つかれるからだ。やがて千葉県に入る。そろそ
ろ、くたびれて来た。尻も痛くなる、取手に入る頃は、日射しもだ
いぶ黄を帯びてきた。むしろノドがかわくので国道沿いの氷屋
で氷を飲む。冷く、しみ通るような、ブッカキの味、二〇円なら安
い気がする。さて、アセの引いたところで、また、ペダルを踏む。し

で、国道から、約三〇分の東海村原子力研究所に寄ったのだが、予
想に反して、みるべきところはなく、あっても、例の官僚主義よろ
しく「立入禁止」、てなわけで、約二時間も浪費してしまう。さあ
大変、昨日、夜おそくやっと決めた、日立市までの走行予定が危う
くなった。いそいで原研を後に、ペダルを踏む。ところが、どうに
かこうにか日立市に入る頃から、とうとう一番恐れていた。ジャリ
道に出食わしてしまった。今まで快適だったのも一変におジャン。
泣きたくなってしまう。しかも加えて、そこから山にさしかかるの
で、車をころがさなければならぬ。これが一層、腹が立つ、全く
一級国道が聞いて、あきれわる。一体、戦後十七年もかかって税金
を何に使っていたのだろう。ヒットラーでさえも、現代ドイツの工
業に、不加之のアウトバーンを作って多少なりとも、ドイツ国民に
そのつぐないをしているではないか。そうすると、現在までの日本
権力階級は、国の工業経済のその重要ポイントである国道をも満足
に作らないという点で、ヒットラーよりも劣るというわけだ。全く
さほど広くもない国土の主要国道ぐらゐ、とうの昔に完成してい
いはずだ……。つい、こんなことも考えてしまう。ついでに雨ま
でが降ってきた。ただ、もうペダルを踏むだけだ。それに日立市に
は、これといった寺がなく、陽もまだ高かったので、少しでも北へ
高萩市まで、行くことにした。そうはいっても、かなりバテている
し雨にたたかれて、そうとうまいっているの、なかなか思う程に
は進まない。ここの道は特にひどく、シャクにさわってペダルを
がむしやりに踏むので、その振動といったらない。すぐに荷台の結
びが、ゆるんでしまう。五、六回結び直したろうか。そんなわけで

クサリきつていと更に加えて、トラックが泥水をはねかえす。全くもう腹が立つやら、情けないやらで、ヘキヘキしているところにふと前を見ると一面が青い海だ。このときはかりは無粋な二人もただただ、その景観に見とれるばかりだ。それで、せつかくの場所だから、今日はここ川尻に宿をとることにした。

三日目

例の通り、午前八時に出発。このペースが一番いいように思う。さて道はいかかわらのずジャリ、君子は黙して語らず。二人とも一切無言、十一時頃ついに勿来海岸を見る、雄大な太平洋の眺めと、その海の青さはこの旅行中でも屈指のものだ。それに加えて生まれ始めて海女を見た。ガイドレールに寄ってみとれていると、土地の古老とおぼしき人が来て、色々と話してくれた。今日の様に天気の良い日は近頃めずらしく、それだから、海女が出ているとのこと。全く、この話には二人とも、つくづく我々の旅行の成功をうなずき合う。それともつかのま、石炭産業の深刻さを、まざまざと見せつけられて、さっきの歓喜も吹っ飛ぶ、勿論ただ通過しただけだから詳しいことは、知る由もないが、今までに通過した市と較べると非常に活気がなく、一級国道沿いにバラックが並んでいるのは、常磐市の経済的背景——常磐炭田が、いかに苦境に落ち込んでいるかを知らされてまざまざと、日本社会の矛盾を考えさせられる。二人とも浮かぬ顔で、足早に常磐市を通過する。一時頃、四ツ倉に入る。そこで金八〇円也のカレーライスを食べる。学校のと異ってなかなか内容はいい、一緒に食べていた三十柄のおっさんと、馬鹿話をして、東北民の人の良さを知る。

ら大半の橋や町は、そこだけだが舗装してあるからだ。つくづく舗装の必要性を感じる。

夕方双葉町に着く。例の通りお寺をたずね回すが、今日はいけない。お盆だった。ようやくたのみ込んで本堂に泊めてもらう。本堂だが、なんだろうが、こっちはありがたい。これでまた、屋根の下に泊まれた。

四日目 無理は禁もつ

予定通り八時に出発したが、どうもいけない。やっぱり昨日の無理がいけなかったか。最っとも、一二〇キロもやったんだから無理もない。一日平均九〇キロのペースだったが、それを破って三〇キロもオーバーして、それでいて路が良くもないのに、いつもより早く陽のあるうちに、宿をとったのだから、かなりの無理をしたわけだ、だが、しよせんは人間、そうそう続くものではなく、今日は、いつもの九十キロなのだが、とても苦しい。とうとう予定の仙台の手前四〇キロの阿武隈川でバテてしまった。つくづく無理はするものでないと思う。しかもそれが最後の日ならいざしらず、まだまだ全行程の半分もいっていない内にやったのだから全く失敗だった。だがまあ、そこで阿武隈川の大きな流れを見ているうちに、ファイトもわいてきた。しかし、速度は一〇キロやっただろう。やっとな仙台市に入って、例の通り、キョロキョロは始める。ちょっと国道から入ったとこに寺の屋根が見えたので、喜び勇さんでたのんだがだめ、しかたがなく交番にたのみむと、夜警小屋を世話してくれた。そこで、いよいよ、そこに泊まろうとしていると、かねてから私達の行動を見ていたおばあさんが、「良かったら家へ泊まりなさい」

四ツ倉という町は、なかなか趣のある町だ。国道も完全舗装だし、その国道の一方の側は黒塗りの倉庫というよりは、蔵といった方がピッタリする大きな棟が続き、その棟と棟との間に見えかくれする真青な海が、自転車で行きながら見えるので、とてもおもしろいリズムをあらわすのだ。なんとなく、江戸時代風な感じをいだかせる町だ。その黒塗りの蔵が、そんな感じをいだかせるのだろうか。それに、その黒地にクッキリと白で書き込んで、円で囲ってある屋号が、妙に印象的だ。旅もこうゆかしいといいたいが、そこを出るとすぐに又砂利道だ。全くこのジャリ道というヤツ程ジャクにさわるのはありやしない。第一、舗装道路に較べてスピードは落ちるし、なによりもパンクしないかと心配でしょうがない。それに、せつかく道路に面してある清水で体を拭いても、五分も走ればトラックの立てるものすこいほこりで、すぐに真黒になってしまふ。ハナをかめば、真黒なヤツが出てくるし、全くこれ程にトラックが走るのに国道の重要性はどうして認められないのだろうか。そんなわけだから、ジャリ道を走る時は必ず手拭いで覆面をし、ムギワラ帽子をまぶかにかぶり、トラックが来れば、もう眼をつぶっての特功隊だ。その姿を想像して欲しい。全く今考えて見ると、よくもそんなおもいまでして、やったものだと思う。

太陽もだいたい西に傾く頃、富岡町に入る。この町はかなり富んでいると見えて、その警察署は、モダンなコンクリート造りだ。それを見ながら通過してきた、常磐市の国道沿のバラックを思い出す。喜しいことに、こういう町はその町の中だけは、舗装してあるので少しは助かる。実際、町と橋が見えた時は、実にうれしい。なぜな

と仏のような御慈悲、勿論、ついに念願の民家に泊まれるのだから、二つ返事でお世話になる。やはり思った通りの、心づくしである。風呂にもまっさきに入れてくれるなど、まるで自分の子供のような御親切だ。お盆の用意で、いそがしいにもかかわらず、あれやこれやと、細かなところまで、親のような心づかいにはただただ東北人の人情を感じさせられた。なによりもうれしかったのは、おじいさんが自転車で行くからと、ビタミン剤をくれた時だ。ほんとうに、頭が下る思いだった。

五日目 松島や

お盆で朝から、いそがしい柿治さんだが、わざわざ、我々二人にお盆の料理をつくってくれ、おまけに昼飯とおやつまで持たせてくれた。全く飯の宿りをしただけなのだが、もうすっかり、なじんでしまふ程だ。そのかぎりない感激を胸に、一路、仙台を後にする。そろそろ体も調子が出てくる頃塩釜に入る。ここは非常に活気のある町で、自転車の前に沢山荷を積んで走るのが目立つ。聞けば最大四〇貫位までそうやって運ぶという。ただただ感心するばかりだ。どうりでイヤに前輪が太いと思った。街中が魚のにおいでいっぱいだ。街中を堂々と汽車が走っている。その汽車も、魚類専門列車だ何から何まで魚づくめの塩釜から、日本三景の松島は目と鼻の先だ。その魚類列車のふみきりを渡って少し行くと、さかんに松島の字が目にくっつくようにカンカン照り、道はすぐにジャリになる。しかも、どうしたわけか、地面が非常に波うっている。多分トラックがブレーキをかけるためになるのだろう。しばらく行くと、右手に大谷石によく似た石を切り出すところがあった。あまり大きなヤ

マではないがそれでも、トロツコの引込み線があるくらいなのだからよく利用されているのだろう。聞いて見ると、大谷石よりもろくて、あまり使用価値はないらしい。左手の川では女の人が腰まで水につかって、しじみを取っている。その土手では、乳牛がノンビリと草を食んでいる。まるで牧歌的な情景だ。

四時頃、石巻市に着き、蛇田中学校に泊ることになる。先生の作ってくれた夕飯と久しぶりの刺身をご馳走になる。二人とも勇んでベタルを踏む。トンネルを出たところで、おやつにもあったリンゴをかじる。一息入れるとベースは上々、潮のにおいがプンプンする。海岸沿いの国道をひた走りに走る。一〇時過ぎに、ついに松島につく。それまで全然見かけなかった、サイクリングの連中が目立つ、しかし彼らの容装と我々とは似ても似つかぬ。同じ自転車旅行でもちがうものだ。作ってもらったおにぎりのうまいこと。そして、ずうずうしくもレディ三人組に写真を取ってくれるようにとたのみこみ、運よくも、この我々の人生の壮年の記念が出来た。今日は十分に時間を取ってあるから楽だ。十分に昼寝してから一路今日の予定地石巻へ向う。ところがあるかわらずには、天台宗西方寺だ。夕方遅かったにもかかわらず、簡単に宿泊をゆるしてくれて、わざわざ風呂までも沸かしかけてくれるなど、その親切は、ほんとうにありがたい。仲々の巨で、ゆっくりとくつろげる。寺で寝るのもいいものだ。方彩に囲まれた庭の線が美しい。

八日目 ついに関東

今日の予定で、やっと関東に入る事になる。四号線に入って今日で二日目。六号線に位べて、単調でつまらない。それに坂が多く、

とても疲れる。第一完全舗装だといわれていたので喜んでいたのでが、とんでも無い。一〇キロ走って一キロはジャリ、こどもまさに悪路日本の名にはじめ国道だ。

出発してまもなく、東北地方の一大工業地、郡山市に入る。そういえば煙突が多いようだ。又ここは、音楽都市とも云われる為か市井に気持の良い音楽が流れている。交通安全宣言都市の大看板がここにも見られるのはチョット気落ちした。最つとも今まで走って来た大半の町にもこの看板が、厳めしく立ってはいったが——四ツ倉でさえも。昼頃、白河に入る。その名前の程には、美しくないところである。ノンビリと江戸の昔の大役をしのぶかのようだ。白河を出て少しいくと、もう関東だ。

関東に入るあたりから、国道は高原状のところを走るようになり、気のせいか車も少ない。ここらは、まさに、サイクリングに絶好だ。快風でとても気持がいい。さいわい路もよい。至る所で水を吸い上げていく。その一つに車を止めて腹にしみたような冷たい水をガブ飲みする。その時の水のうまかった事。あとで分った事だが、ここいら一帯に吸い上げポンプが多いのは、その火山灰地によるという事だ。黒磯橋からの景観は素晴らしい。目もくらむ程に高い橋からの兩岸の眺めは、鮮緑の樹木と褐色の川岸とが相まって実にみごとなコントラストをなしている。これを見て、日光が近い事に気付く、日光に行く事にした。この点の旅行はいい。

気が向いたら行けばいいんだから。実際計画にしばらくはいいので随分勝手に旅行できた。こんな所は無銭旅行のいい所だ。さて四時頃今日の予定の矢板に着く。予定と言っても、その日その日に作る

ののだが……。必至に寺をさがすが、見当らない。サア困ったと思っているうちに、寺は寺でも、アーメンの寺を見付けたので、たのもうとしたのだが、いるんだか、いないんだか分からず、しかたなく又ベダルを踏む。夕方かなり遅く船生の観音寺につく。丁度本堂の新築中で、いそがしい所だったのだが心よく迎えてくれる。土屋といつも話すのだが、そこでの飯の盛のすこかったことといったらない。ほんとに良くもあんなに食べられたと思う。その飯の盛も、自転車旅行で腹が減っただろうとの気持からだと思うと本当にうれし

い。実に見事な満月だ。

九日目 あらとふと

いよいよ、この旅行も終りに近づく、今日は、そんなわけで日光見物とシャレこんだ。でつかいおむすびを作ってもらって、順調に出発する。鬼怒川沿いの県道を一路今市へと向う。道は悪いが、左手にみえかくれする鬼怒川が美しいせいか、余り気にならない。今市に入ってから、さすがに道はいい。例の杉並木の街道を走るのは何んといってもごう快だ。とても水が豊富で道路の両脇の溝には飲みたいほどのきれいな水がドンドン流れている。

途中杉並木の一画から、水が湧き出ている所で一息入れる。

凍るように冷たい水だ。この辺りから、しだいに道は傾斜をおびてくる。さすが国立公園ともなると観光バスの往来が激しい。昼頃馬返しにつく。そこまでもかなりの坂だったが、天下に名だたるイロハ坂に比べれば問題でない。それでもかなりくびれていたもので、ひとまずそこで飯を食う事にした。おにぎりをほうばりながら、ケールブルカーで行くか、それとも自転車で行くかと相談して結局こ

まで自転車で来たんだからというわけで、自転車で登る事にする。とはいってもなにせ七キロからの道程だ。いさぎよく最初から、車をおいてコロガンで登る。

いくら登ってもまだまだ先がある。それに自動車の往来が激しいので、うっかり景色も見えていられない。それでもそんな坂の途中で絵をかくている風流な人がいる。あきれやら、腹が立つやら（何も腹が立つことはないのだが）で、いまいまいしかった。それでも苦勞のかいあって、やっと中禅寺湖についた時はうれしかった。

みやげ物屋に自転車をあずけて、華嚴の滝を見る。すさまじいしづきをあけて、落ち込んでいた。滝を見てみると、となりの人がその滝への飛込み自殺の話しを始めたので、実に不快だった。まったくなにに観光地へ来たのか問いたくなる。ところが帰りは、そんな不快な気持を吹飛す程になりそう。なにせ天下のイロハ坂を下るんだから。標識にもかいてあるのよほど車を降りて行こうかと思つた。しかしこれだけの坂道だ。乗って下りたかったので、結局全部乗り通した。しかしそれにしても予想以上にすごい坂だった。

登りはただ登ればいいが下りはそうはいかない。とにかく急坂で加えて急カーブの連続ときている。しまいはブレーキをあまりかける為手が効かなくなってくる。全く我ながら生きた心地がない。さっきの不快さなど一変に吹飛んでしまったが、今度は余り痛快すぎる。なにせ自動車を抜く程の速さだ。一歩まちがえれば上っていく自動車とぶつかりかねない。

どうにかこうにかイロハ坂の終りに着く。そこからは楽だ。ゆるい傾斜の国道を一路宇都宮へ。今日の泊まりは親戚の家だから気も

はずむ。

十日目 八月雨や

朝からどんよりと曇っていて、イヤな天気だ。案の定二時間も走るとポツポツとやって来た。それがみるみるうちに大雨となり全身ずぶぬれ。どうも台風の影響らしい。それならどうせ止まぬだろうと思い、ドンシャ降りの中をメチャクチャにつつましる。

天気には恵まれた我々の旅行だが、ついにここに及んで完全に見はなされる。というのは、ついでにいい時は、どうにもならない。土屋の親戚も間近かの所で、おからの雨で満々と水をたたえた田んぼへ自転車ごと落ち込んでしまったのだ。全く今年程落ちるのが多い年も珍しい。学校でドブに落ち、これで大学にも落ちれば世話はない。とにかく土屋にひっぱってもらい。やっとはい上る。自転車のハンドルは曲るし、服は泥だらけだし全く困り果てたが、さいわい土屋の親戚のおばさんが、わざわざ風呂を沸かしてくれ、洗濯までしてくれたので、泥の方はかたづけいたが、ハンドルは曲ったまままだ。失敗ではあったが、快我がなかったのと泊まりが土屋の親戚だったのは不幸中の幸だ。

十一日目 野分

今日で旅行は終り、東京に着くはずだったが台風のためもう一日、清水寺(せいすいじ)に泊まることになる。全くいい人達ばかりだ。

千秋楽(八月二日)

台風去って快晴の中を出発する。今日が最後だと思つとチョットさみしくなるがそこは現代ツ子、割り切つてペダルを踏む。

えてみました。聖書を少し読んでみて、哲学の本を少し読んでみて「人間の社会自然からの逃避と対抗」自分の一つの意見として書いて見ました。又宗教を考えているとヒューマニズムという大きな問題に気がきました。宗教の根本を流れているのは邪教でない限りヒューマニズムではないか、と思われるのです。そしてヒューマニズムという言葉に関心を持ちました。そして宗教を対象にしないヒューマニズムとして、人種差別問題という事を材料に二部の「ヒューマニズム」を書いて見ました。

第一部 人間の社会自然からの逃避と対抗

これは現在僕の「社会と自然」に対する一つの意見で、将来この意見に肉付きを見せるか根本的に変わるかはまだわかりませんが、少なくとも現在僕が正しいと信じている意見をここで述べてみます。

※人間は個人の能力の限界を知った時の一つの道として超人間的な宗教を信じる様になる――

僕は宇宙について良く考えます。その度都宇宙の偉大さに、測り知れない大きさに圧倒されてしまいます吹けば飛ぶ様な太陽係を、まして「歩」を打った拍子にその震動ではね飛んでしまう様な地球を思い出します。そのはね飛ぶ様な地球の中で「資本主義だ」「いや、社会主義だ」と、又は「日本は独立国だ」「いや、アメリカの従属国だ」と毛を逆立てている人間……まして松高内で「二年と三年が喧嘩した」「悪いのは三年だ。退学しろ」「いや、停

幸いハンドルも自転車屋で直してもらい、石岡に出れば後は東京まで完全舗装だ。二人とも日焼けで真黒だ。走りながら、約二週間の旅行を回想してみる。土屋も同じだろう。川尼の海、句来の海岸、海、女黒磯橋からの眺め、旅行中の数々の親戚等が次々と、まぶたに浮んでくる。やってよかった。本当にそう思う。この旅行でつくづく、強引にやる事がいかに大切かを知った。これが無かったら東北の人の醇朴さも、自然のみ事さも一切が分からなかったであろう。自分としては一番このことが心に残るように思う。ついに東京だ。美しい夕空に、一番星が輝いている。夜七時家に着く。

出づる月を待つべし

散る花は追うことなけれ

中根 東里



高校にはいって

考えた事

一年 大野 茂 広

はじめに

僕は高校に入つて「考える」という事を覚えました。そして、新聞記事を見て、本を読んで、しばし冥想にふける事もありました。特に宗教と人間について又はヒューマニズムについていろいろ考

学にしろ」とあの小さな会議室でうなっている先生方を考えていると、人間のミクロンの世界観をどうのこうの言っている人間がばかばかしくなり想像もつかない様に大きな宇宙と比較した人間が本当にみじめになって来て、何か漠然とした非常に大きな人間の力ではおぼえないものに頼りたくなってしまいます。人間の微力さに、この世のはかなさに矛盾が感じられた時、人間は「人間を超越したより大きな強力なもの」にすがりたくなるのではないのでしょうか。その「人間を超越したより大きな強力なもの」こそ宗教であり神なのであると信じられて来た。つまり宗教は人間が苦しくなった時に人間が超人間的なものを求めた時に広まるのである。証拠に世界の三大宗教であるキリスト教回教仏教等は人間の苦しい生活の時代に、つまり人間が「この世ははかなくて苦しいのだ。人間の力は微力であつてこれを変える事は出来ないのだ」と感じ易い時代にそして人間がより大きな強力なものを要求していた時代にこれらの宗教は大きく広まったのではないか。それに日本に於ても終戦直後世の中が混乱した時代に人間の生活が窮極に達した時代に色々な宗教が発生した事も一つの証拠となるであろう。結局これらの宗教は現実から目をそむけさせ現実から逃避して、精神的な安らぎを得ようとするものである。

※宗教とジャズの同一性――

宗教が生活の苦しい時代に広まったという事はジャズについてもいえる事ではないだろうか。なぜならば、南北戦争前の黒人は物質的精神的に非常に苦しい時代であつたが、黒人はその苦しみから逃

れる為にあの熱狂的なリズムにひたって何もかも忘れて一時的な精神の逃避を得たのであろう。結局宗教やジャズは、人間が物質的貧困が窮極化した時、人間の力でその窮極を乗り越える事が出来ないと思えた時の一種の精神的逃避にすぎないのである。

※宗教ジャズは現実からの逃避であって、人類の発展を促す事は出来ない。

宗教を信じる事は生活の改善としては世界の改善という人間としてやるべき事を放棄したにすぎないのではないのだろうか。なぜならば人類はこの地球上に現われて以来常に現実を自分達の目で見つかりとみつめて自分達の力で自然を少しづつ征服して人間の役立ちものに変えてきた。もしも石器時代、人間の全てが現在の祈りを主とする宗教を信じる信仰家だったとしたら「この世ははかないものだ。この世を良くするには神の御力を借りるより方法があるまい。では皆で祈るべか。」で終ってしまっていたのではないだろうか。これでは物質的には何も得られず人類は、おそらく滅亡していただであらう。それに前に載せたジャズにしても黒人を生活から目をそむけさせただけであって物質的には何も得る事は出来なかった。結局南北戦争を起したのは黒人ではなかったのである。

結局宗教やジャズでは精神的な安らぎがあっても物質的には何も得られないのである。つまり現実から目をそむけて宗教やジャズにひたっているのでは生活の苦難をなくす事にはならないのである。例え祈ったからといって、トランペットを吹いたからといって腹はふくれないのである。

でしょうか。そして、より良い社会を幸福にくらせる社会を望むなら、我々は自然をより多く征服しなければならぬのである。なぜならば生産とは自然物を人間の役立ち様な製品に変える事であるから自然をより多く征服するという事は、より良い自然物により、より良い製品が出来るという事ではないだろうか。

第二部 ヒューマニズム

僕はアメリカの人種差別問題を聞いてヒューマニズムについて関心をもきました。そして、その後「高一コース」の九月号に「季はもう帰って来ない」と題した。少松川女高生殺害事件を犯人である朝鮮人の季少年（高一コース）に少年という表現をしていたのでこれを使用します。この事について書いた特別記事を読んで、ヒューマニズムに対する関心の度は一層高まって来ました。そしてヒューマニズムの問題について一応思考してみました。しかし、この事を考える時、ヒューマニズムについての特別な本を読んだわけではありません。あくまでこの意見は主観的な意見です。はたしてこの意見が正しいか正しくないかは良くわかりません。どうぞこの意見について批判を加えて下さい。

《ヒューマニズム》

① 人道主義

② 人文主義

《人道主義》

② 人格の平等と共存を理想とする主義

② 博愛精神によって人類共存共栄を計る事を理想とする主義

※人間の連体性団結の力による社会自然への対抗は人類の発展幸福につながる。

あくまで人間の力で、この世の中を改善してゆくには、宗教やジャズにたよって、人間本来の力を麻痺させてはならないのである。それに人間の力とは弱いものではない。人間の連体性団結の力というものは宇宙をも征服するこれこそ測り知れない巨大な力なのである。なぜならば、人間が地球上に現われて以来、特に石器時代の人類にとって食物を安定して得るという事は、現在月にロケットを着陸させる程むずかしい問題だったであらう。まして地球を征服するという事は現在宇宙を征服するという事程ばかり問題だったのではないだろうか。しかし、何千年後の現在の、食物は容易に生産出来る様になったし、石器時代地球を征服するというばかりでかい問題も現在に至っては、地球上で行けない所は殆んど無い、という所まで来た。これは人間の連体性団結の力になる人間の科学の進歩と実践がそうさせたのであって、宗教で礼拝したからここまで発展して来たのではないのである。

※自然をより多く征服するという事はより良い生活が送れるという事である。

現在かかえている宇宙を征服するという事も、石器時代に地球を征服するという事が現在前に述べた程度解決したと同様に、人間が長い歴史の上で一一つ解決してゆくだろう。そしてその為に、いや地球上の大小の多くの諸問題について解決するために今我々は学校で数学や地理や科学をその他多くの学課を習っているのではない

（「広辞苑」（岩波）より）

辞書にはこう書いてある。このヒューマニズムの中で①の人道主義を特に重視してみたいと思う。（以下人道主義をヒューマニズム呼ぶ）

※封建制社会、資本主義社会、社会主義社会においてのヒューマニズムの存在——

題が大変堅くなつてしまいました。こんな事が僕的能力で解決出来る筈がありません。しかし、各社会の社会機構や経済的な状態からヒューマニズムの存在性を各社会の状態から単純に判断を加えてみました。それをやる前に僕は「社会の中のヒューマニズムの活動条件」についてこう考えています。「社会機構や経済が全ての人間に平等である時はじめてヒューマニズムが充分に活動できる」。例えば、社会機構では土農工商等の身分制度がなく支配者と非支配者が居なくなる時、人種的な差別がなくなる時、経済では皆が同様に生活に困らないだけの経済力を持ち、飛びぬけた金持ちも貧乏人も居ない時、つまり人間が人間としてお互いに認め合える様になる時、みんなが幸福で人間としての人間らしい生活条件が与えられる時、その時はじめて社会機構的な平等、経済的な平等という車の両輪がそろってこそヒューマニズムという車体は、その車輪ののって充分な活動が出来るのです。僕はこういう考えの上で、次の様な事を考えてみました。

封建社会でのヒューマニズムはどうだっただろうか。知つての通りヨーロッパでも日本に於ても身分制度はあり、上層の者が下層の

者をおさえるという支配者と人間性を無視された下層の被支配者がいた。この様に社会機構的な車輪はあり得る筈がなかったのである。又、経済的にも貧富の差は激しくこれもヒューマニズムの対象になり得なかった。つまり、封建制社会に於てヒューマニズムという車は両車輪ともなかったのだ。大きなヒューマニズムの活動というものは出来なかったのだ。では、資本主義社会では、確かに封建制度はなく社会機構的な平等というものは存在した。しかし、経済的には、貧富の差は封建時代と同様に非常に大きい。現にアメリカに於て、失業者数は世界最高だ——、ニューヨークの裏通りの路上でアルコール中毒患者が死んでゆくのを知っています。資本主義社会に於てのヒューマニズムという車の車輪は、社会機構的な平等という片側の車輪だけあり、他方はまだ付いてはいなかった。それがゆえにヒューマニズムという事は充分な活動が出来なかった。社会主義社会におけるヒューマニズムだとどうだろう。僕は社会主義というものを良くは知らないが、わかる範囲で思考してみました。社会主義社会においては、社会機構的な平等はむしろんの事、経済的な平等も資本主義社会と較べてもはるかに徹底している。つまり、社会主義社会においては、ヒューマニズムという車にはじめて両輪が付いて、充分な活動が出来るのではあるまいか。現にソビエトや中国で失業者が多すぎて困ったり、路上でアルコール中毒患者が死んだという話は、いまだに聞いた事ありません。『歴史はヒューマニズムがより完全になる方向に進んで行くのです。』

しかし、社会主義が完全にヒューマニズムの活動が行なわれている。とこうわけではない。なぜならば人間は永久に完全なもの（こ

追いやったのは何か？ 誰なのか？ その原因はハッキリしてはい

ではないか？ そこで彼について少し調べてみよう。

一九一〇年、日韓併合という名の元で朝鮮から日本へ十数万名の朝鮮人と共に強制的に連れて来させられた。父は九州の炭坑で酷使され、現在五〇の年を越えながら日雇人夫をやっている。そして季珍守は昭和十五年東京の朝鮮人部落で生まれた。その後、空襲で焼け出されて上篠崎町に移り、親子九人が六畳の間で生活した。中学時代、彼はこの貧しさから何回か本や自転車等を盗み保護された事もあった。しかし、彼はズベぬけた学力があった。知能指数一三五という秀才だった。中学時代、クラス委員、生徒会委員長にまでなり、級友からもかなりの信望を集めていた。中学を優秀な成績で卒業した彼は、「精工舎」と「日立製作所」に志願した。しかし、『朝鮮人』という彼の兄と同じ理由で彼は入社出来なかった。日雇いのわずかな日当を泥酔して帰って来る祖父、終日働いて百円にもならない手内職で家族八人をささえているおしの母、このどん底の生活から、いやそれだけではないまだ大きな理由から、季少年はロープで自殺を計ったが未遂に終わった。その後朝鮮人であるが為に良い職にもつかなかった彼に、重々しくのしかかっている朝鮮人差別という問題が非常に非常な形で爆発してしまったのである。

——殺人。

これが彼をあの非人道的な行動に追いやった最大の原因ではないのでしょか。結局、僕は非人道的な殺人にヒューマニズムという

こでは二つの車輪）を作る事が出来ないからです。つまり、社会におけるヒューマニズムという車の車輪には必ず破損箇所があるのです。たとえば、資本主義社会において社会機構的な平等つまり人間の地位的な差別がない筈なのにアメリカの黒人差別問題、日本の朝鮮人差別問題、部落民差別問題というような差別問題がたぐさんある。社会主義社会においても、経済的には平等である筈なのに、完全なものではないのです。そこで我が国日本での人種差別問題の一つである朝鮮人差別問題に、小松川女高生殺害事件を材料にスポットをあててみよう。

※小松川女高生殺害事件と季少年

そしてヒューマニズム——

昭和三十三年九月一日、小松川女高生殺害事件の犯人季珍守は、朝鮮人部落で逮捕された。季珍守は小松川高校定時制二年太田芳江さんを殺した。そして、工員田中せつ子さん殺しも自供した。彼は犯行の目的は「わからない。」と言った。それについてある新聞は、「役は変質者だ。自分のした行為を「わからない」というのは、責任ののれの口実にすぎない。死刑にすべきだ。」と。そして、三十六年最高裁で彼は死刑の判決を受けた。しかし、大学教授の旗田勲・上原専禄・作家の吉川英治・大岡昇平・三宅艶子らから、減刑嘆願運動が起ったが、翌年（三十七年）十一月十六日午前六時、絞首刑が執行された。

これで、この事件は終わった。しかし、警察で取りあげなくとも完全にこの事件は解決したわけではない。彼をあの非人道的な犯行に

高生殺害事件を我々はどうとらえたいのだろうか。

この殺人をやったのは季珍守、しかし、季少年をここまで追いつめたのは日本の社会なのです。『精工舎』や『日立製作所』はどうして朝鮮人を雇わないのでしょうか。雇うと会社がつぶれるとも言いますか。生産能力が落ちるのですか。不思議でなりません。ヒューマニズムを知らない。人道主義を知らない。朝鮮人を日本人と同じ人間と認めない。まるでファシストかユダヤ人を見る様な見方で、日本のブルジョアは朝鮮人を見た。あいにく人間性というものを持ち合わせていないブルジョアを、この事件の犯人の一人にすべきではないのでしょうか。季少年が逮捕された時、ある若いジャーナリストはこの様に書いた。

「もし日本人で普通の家庭で育っていたら、こんな特異な犯罪を犯しはしなかったろう。小学校、中学校時代を通して、クラスのリーダーとしても信望を集めていた季珍守は、『金子鎮宇』という日本名を使い、『朝鮮人』として生まれた不運に拒絶しながら成長した。アンデルセンの『みにくいあひるの子』のように——。しかし白鳥の世界は決してこの白鳥ぶったあひるの子を受け入れはしなかった。」「罪と愛と死」（三一書房）より。又、同書にはこういう事も書いていた。これは我々が世界全体の人間が、ヒューマニズムを重んじる人間すべてが、この事をもう一度考えなければならぬ事ではないのでしょうか。

「アメリカの異人差別、日本の朝鮮人差別、そして又、この地上での人間が人間をしいたげる差別の悲劇をなくすために努力することとは決して遠大な事業ではない。あなたや私達、一人一人が澄んだ

目で相手を見つめ、理解するときそこには、理解と愛だけが生まれるはずだ。

まず、あなたたちのまわりにいる。日本の中の六〇万人の朝鮮人達の深い悲しみと怒りとそしてよこぎを知ってほしい、日本人と朝鮮人にとって非常に不幸だったこの「小松川事件」を一つの窓として……」。



ある日ある所で

一年 須長 玲子

その一

太陽は頭上にあつた。町はシーンとして、きたない、ほこりだらけのメインストリートに居る二人だけのようだった。

男は、相手の男をにらみつけた。三十メートル程離れた相手の荒い息づかいが聞こえるようだった。

ワン・トゥー・スリー……ダン

男はゆっくり銃をしまった。そして、ほこりだらけの道の上にくずれ折れた。相手は銃をしまうと、馬に乗り、去って行った。男の回りには、町の住人達がワイワイと集まって来た。

太陽は頭上にあつた。映画スタジオの屋根を、ガラガラと照らしていた。

その二

太陽は頭上にあつた。

四時の汽車が駅に着くには、まだ大分時間があるというのに、小さな娘は、朝からもう七度も門の外へ出て、駅の方をながめた。そして、その度に母親は出て行き、家の中へ戻らせた。だが十分もしない内に、その小さな娘は母親の目を逃がれては門の外へ出て行った。娘は待っている。町へ出かけていった父親とおみやげを……。

太陽は頭上にあつた。駅の方からはまだ誰も来ない。

その三

太陽は頭上にあつた。

綿の葉の上に、白いフワフワした花が乗っかっていた。黒人達は口をきかない。時折り、鋭いムチの音がする。うめき声がする。彼等がかぶっている破れた帽子の陰から、物悲しいあきらめの瞳が光る。

彼等の腕にはムチの跡がある。そして、首に、顔に、黒く光る背中に、やせた胸に……綿つみは続く。

太陽は頭上にあつた。まだ沈もうとはしない。

その四

太陽は頭上にあつた。

ジリジリと乾いた土を焼いてほこり臭い風が、男のバサバサな頭をなびかせる。

男は岡の上に居た。足下に小さな町が見える。男は、ベツとつば

を吐くと、帽子をまぶかくかぶり、馬にまたがって去って行った。

太陽は頭上にあつた。あとは草いきれがムンムンとしていた。

その五

太陽は頭上にあつた。

女は頭の上に、チョココンと乗っている小さな帽子に手をやって、ほこりっぽいでこぼこの道を横切って行った。

女のスカートの折からの強い風に吹かれてふくらむ。雑貨店の入り口にたむろしていた一団の老婦人達は、女のスカートのフワッとしているのを見て、顔を見合わせてうなずきあった。

太陽は頭上にあつた。一向に風のやむ様子はない。

その六

太陽は頭上にあつた。

妻は、想い出にふけていた。大きなもみの木の下でのベンチの上で……。

子供が赤ん坊で小さかった頃を。片言で母親の持っているキャンデーを欲しがった頃を。病気になる、高熱でうなされて泣いていた事を。自分が、連日の看病疲れでうとうとした時、夢の中で白い死に神が、子供をつれて行ってしまった事を。そして、ハッと気がついた時には、子供は本当に死んでしまっていた事を。

夫は、沈んでいる妻の肩を抱きしめた。二人は寄り添いあって歩み去った。

太陽は頭上にあつた。二人の太陽は昇りはしない。

その七

太陽は頭上にあつた。

どの馬も一列に並んで鼻の穴をふくらませ、足踏みをしていた。乗り手たちは、自分の競争相手を横目でにらみ、値ぶみをしていたし、見物人は、小さい金額でかけあっていた。

審判をかねたスターターが、大声で注意をし、銃をうつと同時に馬も乗り手も一緒に飛び出した。

乗り手はやたらに、馬の腹をけとばし、むちを鳴らす。

太陽は頭上にあつた。乗り手も、馬も、見物人も、汗にまみれ、ほこりにまみれて声をからしている。

その八

太陽は頭上にあつた。

彼等は木につるした、ハンモックにゆられ、ある者は午睡の夢をむさぼり、ある者は小説を読み、勝手な想像にふけていた。

せみの鳴く声が響きわたり、木の枝は、そよとも動かないでいる。

一匹の大きなハエは、木の葉の陰に止まり、動かなくなつた。

太陽は頭上にあつた。青空にうく白い雲は、ねむけを誘う。

その九

太陽は頭上にあつた。

まわりは岩だらけで、カウボーイ達は、かわいていた。……水にも酒にも……。

牛もかわいている。一点の緑色さえ、赤茶けた岩しかない平原に

は見えない。砂と、風と、河のあとばかりだ。

牛はいら立つ。カウボーイもいら立つた。そして、彼等が乗っている馬もいら立つた。ボスは大声でどなりちらし、カウボーイ達も、ささいな事からよくケンカをする。

太陽は頭上にあり、一点のかげさえ見えない。

その十

太陽は頭上にあった。

作家は木陰に座り、知りもしない外国のこと、生活のことを書き散らしていく。

その作品たちは、作家が自分勝手に想像し、夢に描き出して、くだらないことばかりを書いたものだった。そして、それらがしだいにふえていくのを作家は内心得意に思っていた。

太陽は頭上にあり、作家は、一人で自分の書いた本がベスト・セラーになるのを夢見ていた。



最高の想い出

三年 滝口和成

テンテンチャンキントンテンキチャンキチャンキ……。

「えー。お笑いを申し上げます。昔から、いそうろうと川柳とは仲の悪い物でもしろい川柳がございますな。」

それは人並以上の努力であった。しかし、その具体的な事は、紙面と良心が許さない為ここではひかえさせていたきたい。

ここでこの紙上をかりて、演劇部始め、他のクラブ、委員会に多大な御協力をいただいた事を心から感謝したい。

これだけ他のクラブや委員会から期待をかけられているかと思うと一同ますますファイトに燃えた。あと文化祭まで一週間。皆最後の練習に余念がない。

『えー、毎度ばかばかしいお笑いを……、只今では世の中も変わり……』

「○『そうよ、あたぼうよ』

△『何で、そのあたぼうってのは。』

○『何だ、てめえ江戸っ子だろう。江戸っ子は気が短けえんだ。これはな「あたりめえだ、べらぼうめ」を縮めて「あたぼうよ」わかったか、べらぼうめ!!……』

皆話しぶりも板についてきた。

さあ、いよいよ明日から文化祭である。前日は目の廻るような忙しさ、まず会場を作る。これも材料が充分あるなら事はスムーズに運ぶが、あちらこちらの寄せ集めで、その組合せは又大変である。

夜もふけてやっと会場が出来上り、全て後は明日を待つばかり。出来上った会場を改めて見て、ここまで無我夢中でやってきた自分が本当の自分であることを初めて知ったような気がした。いやここまでやってきたのは決して自分だけの力ではない。皆の、全員の「協力」ただそれだけだ。

皆の顔が、明日からの文化祭は、必ず成功させるぞという自信に

『いそうろう三ばい目にはそっと出し。』

『いそうろう出さば出る気で五はい食い。』

なんて……』

これは手前の、十八番と自負する「湯屋番」の出だしである。話もいろいろとおぼえたがこの話が一番性に合っているように思う。又自分も一番好きな話である。想い出せば、去年の六月頃に、念願だった落語研究会を作る決心をし、署名をとった。署名は予想以上に集まり、研究会は成立した。

俺が猛烈なファイトと意欲が腹の底からわいてきた。と同時に、何か背中に何百貫という大きな重い石をしょわされたような気がした。しかし、その石をもちあげることができない以上のファイトが体中からわいてくるのをおぼえた。俺は心にちかった。「何くそ、何が何でも十月の文化祭には成功させてやるぞ。」と。会員をつのつた所、十数名が集まり、皆心よく俺に協力してくれ、皆やる気十分で、文化祭に必ず成功させる事を誓いあった。またたく間に夏休みが終り、いよいよ二学期である。

夜を日についての練習、とは少々大げさであるが、しかし、この言葉が恥をかかないくらい、皆まじめに、真剣に練習した。

屋号も「松高」をもじり「笑広亭」と命名した。下にそれぞれ、個性のあふれた名前「喜林字」「神無蔵」「変人」……等。それぞれ出し物も決まり毎日練習の明けくれである。

全く0からはじまったクラブの為に、何一つない。着物一つにしてもそれぞれ持ち寄りである。又同好会なので、一円たりとも金には縁がない。何とか少しでも、金のかからない工夫をした。それは

満ちあふれているように思わず自分の顔もほころんできた。

いよいよ当日。午後の部の公演の前に講堂の舞台出演が待っている。着物を着る手が思わずふるえる。テンテンチャン、チキチャンチキチャン、チキチャン……

「えー。満員のお運び有難うございます。毎度お笑い専門でございまして。」

昔からいそうろうと川柳とは仲の悪いもので……。

あ、笑っている。会場一ぱいに笑っている。俺の心は、何にも取ってかえることのできない幸福感に満たされた。この感激は舞台上に立ったものでないと絶対に味わうことが出来ないものである。

「○『どうした三ちゃん、顔から血がでているじゃねえか』

△『あ、いけねえ、夢中で見ていたんで軽石で顔をこすっちゃまった』

きこえる、きこえる。拍手だ。確かに拍手だ。俺は成功したんだ。あの時の感激、あの時の感激は、一年以上たった今でもはつきりと思ひ出すことができる。あれこそ高校生活に於て、いや、今迄の短い人生に於て「最高の想い出」であろう。

会場（教室）の方の公演も、一日三回とも毎回満員御礼の幕がさがるほどだった。成功だ、成功したんだ。「おい、成功したよ。」「おお、よかったな。」「笑ってるよ。」「ああ、皆笑っている。」「皆の言葉もときれとぎれで、この興奮をかくせない様子であった。

短い二日間の文化祭があつという間に終ってしまった。

しかし、あの二日間は、俺の人生においては二年にも三年にもあたいするように思える。まずあの二日間は俺の人生に大きな自信と

勇気をあたえてくれた。人間、やろうと思った事はやって見る事だ。実行するだけだ。途中で大きな石につまずいてころんでも、又起きて走りだせばいいんだ。先の事なんてその時になってみなければ分らない。俺達若者には「躊躇」という言葉はない。こういう社会勉強は、学校の教科書には、どこにも書いてない。自分で、身をもって体験して行かなければいけないんだ。

これからのこの経験を生かしてもっとも自分のやりたい事をやってみようと思う。これが二日間の文化祭を終えて感じたささやかな反省である。

でも俺達はあくまで高校生なんだ教科書の勉強もガッチリとやらなくてはね。



ソフト・野球・友達

三年 細山正美

トヨバンは小学校の四年か五年頃、私達の小学校に転校して来た。転校当初から、かなりお転婆娘だったと記憶している。級は違っていたが、私の友達がトヨバンと仲良しなので、帰る方向の同じ私も、一諸に帰ったりした。だから少し位はトヨバンを知っていた。友達の話によると、トヨバンのお兄さんは、プロ野球の選手でNチームに所属して、クリーンアップトリオの一人だという。

その頃の私の野球知識といえば、バ・リーグとセ・リーグに分か

待つんだよ。球が一m手前に来たらバットをこういう風に垂平に振る。判った?』と一人でしゃべってからさっさと職員室へ戻っていった。『ジョー談をいわないで下さい。一度ですべてをのみこんでしまう私だったら、今頃、女だてらに、プロ野球で活躍していますよ。』まだ先生がその場にいたら云っていたかも知れない。イライラしていたので、キャッチャーの頭を完全にすっぽり抜けるような球に手を出してしまった。時、正に二死満塁。私の打った球は三塁手の頭上を越えレフトとセンターがウロウロしている間に、三塁へ。『ナンダ、ソフトツテ、コンナニカンタンナモノナノ。フン!』と、うぬぼれてしまった。皆はニコニコだったけれど、顧問の先生はしぶい顔をしていた。

ソフト部に入ったものの、ルールをよく知らない私は、次の日から困ってしまった。トヨバンはよく知っていた。

一応シャクにさわったので、ソフトのルールと、ほとんど同じ野球のルールを勉強した。ラジオを聞き、テレビを見、新聞や教科書を読み。寝食を忘れないようにしながら努力した。

トヨバンの兄貴の事も判ったし、チームのことも判って来た。兄貴は、かなりの美男子で平均した打率の選手。Nチームは三年連続ベナントレース優勝。日本シリーズでは対手、Gチームを三年間、ノックアウトで三年連続シリーズ優勝、真のチャンピオンである。

トヨバンの兄貴は、最高殊勲選手になり、自動車をもった。後でトヨバンの家に行ったら、トロフィーやベナントはきれいにかざってあったが、この車は、雨ざらしのボンコだった。最高殊勲選

れて巨人というチームがあり、川上という選手がいるという位だった。トヨバンと私が急に仲良くなったのは中学に入ってからのことだった。偶然にも私とトヨバンは同級生になった。席も近くなり整列の順番も近くなり……。あとで友達に聞くと、『姉妹かと思う程仲が良かった。』という。入学式の写真にも私とトヨバンは腕を組んで写っていた。入学式の写真で、腕を組んで写したのは、後にも先にも、この一枚である。しかし、仲の良かった割に二人で写したという写真は一枚もない。私は小さい時から写真が嫌いだったのできつとトヨバンと写すことを遠慮したのだろう。

中学校に入学して、クラブ活動に興味を持ちバレー部に入った。しかし、先輩の一人に大変意地の悪い人がいて、友達がいじめられるのを見、耐えられず二ヶ月位でやめてしまった。

トヨバンは最初からソフトに興味を持っていたらしい。私がバレー部をやめた時、一諸にソフト部に入ることを勧めた。男の子みたいで嫌だったけれど、好奇心もあったので、OKしてしまった。

最初の練習日。さすがにトヨバンはカエルの妹(?)は……で上手だった。生まれてはじめてバッターボックスに立った時、ドキドキして変な気がした。一球目も二球目もカラ振り三球目もカラ振りした所へ、いつも赤い顔をしているくせに、『俺は色が白い。しかし、男の色白は自慢にならないな——』というのが口ぐせの社会の先生がそばに来て『あのね、バットは大根じゃないんだから、そんな持ち方をしない。コウ。ソウソウ、そしてね肩のこの辺まで、コウイウフウに持って来て、腰を入れて、後足に体重をかけて球を

手で思い出したが、トヨバンの家の近くに、熱狂的な女性のファンがいて、Nチームが優勝した時、兄貴にだきついて来たという。しかし、兄貴が結婚するとしらんぶりで、優勝しても全々反応がないとか……。この女性は、兄貴のお嫁さんになる気があったのかしら……。こういうファンはあまりありがたくないものだ。現在だつて野球のルールも知らずに、あの選手の目がすてき、口元がチャミング、あげくの果てには、熊の品評会でもないのに、胸毛がいいなんていいだす人もいる。別にルールを知らなければ野球や選手に興味を持つてはいけないというのではないけれど、もっと深く、日本の野球をみつめてもらいたいと願うのは、私だけではないだろう。どうかこうにかソフトの様なものが身についた頃区内中学校の球技大会に出られるようになった。第一試合は、トヨバンはレフト私はセンター。ドキドキしてしまって、応援する人の顔などみられたものではなかった。

最初のバッター順がまわって来た。足が、ガタガタふるえているのが自分でも判り、思わず苦笑い、さらに三球三振でいやになってしまった。が、もうすぐベンチだろうと考えていたら、何となく落ち着いてきた。二回目のバッターの時は二塁打、三回目がランニングホームラン、四回目三塁打と打ちまくった。私達は決勝まで進んだ。ここまでは良かったが、その決勝戦のおそまつさは、今、考えても恥かしい。無死満塁。四番打者のカーンと打ったその球が、私の方へ飛んで来たのは判ったけれど、球が何処へいったか判らない。その間に、走者全員生還で、4-0。さらに同じことを繰り返して、8-0。

私達の攻撃も皆三振で、早くも二回にコールド負けをしてしまった。悲しいというよりも疲れたという言葉の方が先に出た。何しろ一日に三試合をしたのだから。

二度目の球技大会も決勝まで進み、又、コールド負け。審判の先生が、『決勝戦でコールド負けなんておかしいな』と、いついたのを覚えていた。

二年の時も三年の時も、トヨバンとは級が違ったので、余り話す機会もなく卒業を迎えてしまった。トヨバンはすっかりしていたし女性らしさも多分に持っていた。トヨバンが私にプレゼントしてくれたバースデーカードに、『人間なんて、自分で考えているほど生やさしいものじゃないわね』と書いてあったが私には、大変印象深いコトバの一つである。

卒業後トヨバンとは高校二年の時に、たった一度会った、友達がいた関係もあるが、よそよそしい彼女の態度は悲しかった。トヨバンが、野球やソフトという楽しいスポーツを私に与えてくれたことを感謝している。こう書くと、トヨバンと私はただ野球やソフトだけの関係と思われそうだけれど、トヨバンは、いろいろな意味で私の親友だと思っている。

(トヨバンとは彼女の気取らない性格を示す意味でのニックネームである。)

× × ×

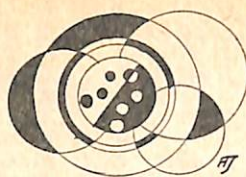
高校に入ってから、野球とソフトを通じて、三人の友を得ること

書き残したきこと。その一

私達のつけたニックネーム。

先生(土屋ちゃん、ズイ肉、センチメンタル、フランスペイン、ハリキリボーイ、グレンデル、掃除タスキ、カマキリ、恩師、空中金魚)生徒(ミイラ、ガイコ、コッ、カントク、社長、スカンク、カバ、サツカリン、イモ、アパッチ、アンパン、ハナ、クビ、レバー、ボールド、ハゲ、サークルライン、皮膚ガン、ワシ、サキ様、……)

その二、ハナ君へ、Nチーム万才!



たち

三年 大西 修子

「類は類をもって集まる」なるほど! 我等「たち」もそのようだ。人から見れば少しも女の子らしい所がないそうで(「たち」は女の中の女と自負する)そろって悪戯好き。その為あらぬ嫌疑をかけられて、無実の罪に泣いた(??)事もあった。以来少し自省している。又、人は言う。「ちょっと変わり者ヨ」そうかなア? 自分達は普通と思う。そして又、野球が大好き。偶然か? 必然か?(神のみぞ知る)そろってライオンズファン。その他いろいろ条件

が出来た。入学して二日目に口喧嘩をしたミイラと、人当りの良い令嬢監督がNチームのファンであり、いつも一人で外を見ていて、ぶっさら棒な話し方をするガイコがトヨバンの兄貴のファンであるのを知ったのは、球技大会の前だったと思う。トタンに仲良くなり、一年ながらソフト優勝をと、私のビッチャー、ミイラのファースト、ガイコのショート、監督のサードで張り切ったけれど一回戦、二回にして、10-20のコールド負け。なんのことはない。約分すれば、2-1ではないか。(負けおしめ)負けたことにより(?)私達は一層仲良くなり二学期に、先生の眼を盗んでは授業中に編集した。週刊レジャーは、評判がよく、一部で、読みたいが為にジャンケン迄して、順番をきめる人が出て来る程だった。

二年になると、監督が隣の級となり、ミイラとガイコと私は同級になった。

同級生にGチームファンの男子が一人(彼の名をハナという)いて、常にNチームの悪口をいっては、かよい私達をいじめた。本当にハナ君は、ハナハナ迷惑な存在であった。今度こそはとハッスルした球技大会も、8対1でコールド負け、一年の時も今度も、土曜日の第二試合だったのはおもしろい話であり、しかも二回でコールドなんていうのは、本当に私達を泣かせた。楽しいはずの土曜日は私達にとって運命の土曜日となってしまった。一度あることは。

三年になると級は完全に分裂してしまった。しかし、二年間、胸に秘めた、望みも、ミイラの級は4位、私達の級は2位と、最初で最後の優秀な成績を収めることが出来た。

が重なつて、我等「たち」は金は持てぬが「類」をもって集まったという訳。

書き遅れたが「たち」とは、悪友たちでいる時の方が多い我友達(幸か不幸か皆女の子)の事である。私は親愛の情を持って、悪友たち「たち」と呼ぶ。そして私も又、その「たち」の部類らしい。明かるい性格の重要性、「たち」とは全く楽しい連中だ。口は非常に悪いが、気性がサッパリしている。皆、本名の他に別名、俗に言うニック・ネームを持っている。フトシ、ガイコツ、ニック、スカンク、コッ、デンコ、等々。私のは省く。なぜってこの上私のみで書いたら「考古学にでも掘ってらんじやない?」なんて誤解されちゃうから。でも実際三年間これで呼び合っている訳だが、不快だなんて思った事は一度もない。むしろ愉快だ。何しろ「たち」が本名で呼ぶ時は、殺氣を感じる。その後、決まっておせじ笑いして「ネエ、お願い。」とか「ごめんなさい。……しちゃった。」と、くるから。思うに、親近感という点に於て、ニック・ネームの果た役割は大である。この様な「たち」かの明るく解放的な性格は、おとなしくショボツとしている私の性格(「ウソだ。」なんて言う人は、いませんヨ、ネ。)と少しでも明かるい方へと導びいてくれた。そして、その性格の重要性を教えてくれた。積極性。「たち」とは野球の話ばかりでなく、実際にソフトボールもやる。人は「女のくせにスゲエナア」「下手なくせに」とか言うけど「たち」は「気にしない、気にしない。」「あんまりいろんな事気にしてたら、頭がハゲちゃうわよネエ。」等言って下手同志大いにハッスルして楽しんでる。言うなれば「たち」は「竹馬の友」ならぬ「ボールの友」でもある。

る。ここで私は積極性、自分の意志をはっきり示す事等を、体得した。忠告。心からの忠告は、その人の事を本当に思っている人しか言ってくれやしない。なぜって「忠告」はめったに歓迎されない。しかもそれを最も必要とする人が常にそれを敬遠するからである。友情厚き「たち」は、よく忠告し合う。単刀直入ズバリと言う。その時はやはり少しシャクにさわっても、すぐ後で「全くその通り」どうもありがとう。」という感謝でその忠告を受け入れる。自分の誤りは素直に認める。出来そうで、出来ない事の一つである。

人生に於て不可解な事。社会の矛盾。受験。いろいろな問題が私達の前にある。「たち」は騒ぐばかりではない。私達なりに考え、話合いもした。その考えは幼稚で、そしてその問題は私達にとつてあまりにも難しいかもしれないが……。他人の意見を聞く。「そういう考えもあるのか。」自分の気が付かなかった事や考え方。視野が少しは広くなったと思う、

高校生活に於て、一心不乱に勉強する人。クラブ活動で張り切る人。その他いろいろな人達がいる。そして、皆何か自分の「もの」にして卒業して行く。私は人間を通して「たち」を通して、いろいろ学んだ。冷たい活字でなく、生きていく何かを学ぶ事が出来た。「たち」を持つ事の素晴らしさ。文章も「も」とかいた理由をおわかりかナ?」下手な私が、あえて恥をかいてまで、この様な迷文を書くのは、こんな理由からである。

「真の実存は単独な自己存在においてのみ可能であるそうかもしれない。いや、本当にそうだと思う。人間は孤独だ。しかし、「朋友はわが喜びを倍にし悲しみを半ばにす」という言葉がある事を忘

れてはならない。孤独だからといって孤独がある事はない。人生に於て「たち」を持つ事は、どんなに素晴らしい事か!」友情は愛せられるよりは、愛すことに存す私達は良い「たち」になろうではないか! 良い「たち」を持つ為にも……。



想う事

三年 青木 澤子

最近私は夜道を歩くのが好きになった。涼しい風が頬をなでて通り過ぎる。昼間の焼け付く様なキラ／＼した太陽はずっと向うに姿を消している。線光花火が美しい線を描いて散った。

「ちいちゃんの浴衣の模様みたいね。」小さい女の子が小声で言った。

青白い水銀灯の光が円く街角を照らしてる。幼い頃不気味に聞こえた自分の足音でさえ、私の果しなく広がって行く幻想の世界に一役買っ出て出る。

私は歩きながら色々と想像をめぐらす。それは一人で夜道を歩く

時——夏の夜——

× × ×
生まれて来る前
どんなだった?

何も無かった

お前が生まれる可能性だって

一パーセントも無かった

お前の生まれる前は

お前のカケラも無かった

時間は継続していた

原始、いやもっと前から

地球、いや太陽が出来る前から

しかしそこには

お前の生まれる可能性なんか

一パーセントも無かった

お前のカケラさえ無かった

唯の「無」にすぎなかった

死んだ後

どんな風になるの?

何も無いんだ

お前が死んだ後は

残るのは死んだ肉体だけ

その肉体は時間が解剖し

バラ／＼になって

土の肥料と土自身になる

土から出たものは

又元の土になるさ

時間は継続している

月での居住時代

いやもっと後まで

第四次氷河時代

いやもっと後まで

しかしそこには

お前の生きた存在なんて

一パーセントも無い

お前の肉体さえ無い

唯の「無」にすぎない

「無」と「無」にはさまった

お前の短い人生

今迄 十八年間の過程に

何があったと思う?

狭い人間と人間の関係

愛、憎悪

喜び、悲しみ

尊敬、屈辱

利用……

本当に狭く息づまって

それでもお前は探している

血走った目を光らせて

これから分らぬ先の経過に

何があると思う？
「無」と「無」の間に……

私は時々考える。何故生きるのか、と。「食う為にさ」誰かが言
った。それでは何故食うのかね？「生きる為に」水掛け論である。
私は思う。「死ぬ為に」と。

私の歩いているこの道。この人生の道は一本である。いや二本の
レールかも知れない。そしてその上を暴走している私……。

私は感じる。自分で切り開くのではなく、すでに敷かれているレ
ールではないかと。このレールを運命と呼ぶのか。神を信じる人
は。最近いや、もうずっと前からこの真理を知ってはいた。そして
又自分で意識していながらもレールの上を走らなければならぬと
知った時、この世の中の物全てがわざとらしく見えた。歯の浮くよ
うなおせじ。他人の視線を集めようとする酷い心。目を避向けた
い！

どれぐらい前の事だったか、毎日の生活に張があった。その時は
唯素晴しかった。だが今思い出すと私の顔に出るのは苦笑のみ、あ
の時でさえ、この二本のレールの上の出来事だったのだと思うと
……。

自分の予感が当ると妙な気持になる。私はいつか予想した事があ
る。「私は多分こうなるだろう」そして今、その予想は当たっていた
これは何だろうか。

コッーンと音をたてて……
みんなが涙をこぼした
見せかけの涙も……

一人の人間は
土になった
その頃には
みんな忘れていた
その人間が死んだ事を
その人間がいた事さえ
みんな忘れていた

田舎の墓地の片隅に
寂しくその墓はある
今でも尚……



徒然なるがゆえに

一年 大沢 則 夫

徒然なるがゆえに、僕はこんな事を書きつけるのである。よって
僕は徒然なる人に読んでいただきたい。

さて、僕の事を話す前にあなたの事についてお聞きしたい。あな

私は今考える。タイム・マシンがあったら、と。ウエルズはどん
な事を想像しながらこの小説を書いたのだろうか。この過去にも未
来にも行ける機械、もしタイムマシンが私の手元にあったら。過去
と未来とどこに行くか過去に行ったとしたら、それは私の生まれる
直前に……。だとしたら私はここに生まれたくはなかった。そして
又未来に行くとしたら、それは私の死んだずっと後に……。いずれ
にしろ、私はこの世の中に生きる存在にならなくなかった。

——晩秋の夜——

ある日の朝

一人の人間が死んだ

その顔は固く

こわばっていた

行列は長かった

みんなうつ向いて

黙っていた

田舎の道は長かった

白い喪服の行列は

ずっと続いた

やがて墓地に着いた

棺はその前に置かれた

読経の音が

寂しく響いた

棺は穴の中に入れられた

たは今までに、旅に出たいというような気持になられた事がありま
せんか。それも、仲間の居ない旅です。自分一人だけの旅です。目
的地も定めない旅です。僕は、良くこんな旅に出ている自分を想像
します。僕は、何時でもロマンチックな夢ばかり見ています。僕は
この夢の中に居るだけでも、最高にたのしいのです。きょうは、な
ぜゆえに、僕がこんなに夢の中でばかり生活するのかを、話してみ
たかったのです。

僕の生まれた所、それは栃木県の太平村でした。現在は太平町に
なっています僕の家の近所には、永野川と呼ばれる川がありまし
た。川幅は、10メートル位でした。その川には、一日に数回、バス
の通る石の橋がかかっていました。そして、その橋の傍には、礫山
という小さな山があったのです。昔は、石切り場だったという話で
す。僕には、ほとんど人間の友達がありませんでした。僕は、幼い
頃からロマンチストだったのでね。何時も一人で遊んでました。
でも、少しもさみしくなかったのです。なぜなら、世界中で最も素
晴しい友を持って居たのです。そうです。僕は、最高の友達を持っ
ていたのです。それは礫山であり、そこから見渡すことが出来る多
くのものです。永野川や田んぼ、小川や雑木林等々。それらはす
べて僕の友達でした。特に雑木林は、四季を通じての友達でした。
僕は何時も、筒っぽを着て、ズボンをはき、ぞうりをひっかけてそ
れらを歩き回ったものです。小学校に入ってから、大した変化は
ありませんでした。飽きることはなかったからです。そんなこと
を考えたことはありませんでした。何がそんなに楽しかったのか
ですって。そんな事は、聞く方が野暮ですよ。一度彼等の中に、飛

込んで御覧なさい。初めて入るんだったら、やはり春秋がいいですよ。きっと小鳥が最初に歓迎してくれますよ『行つてはいやだ』と言つてだだをこね、服を引っ張る木だつて居るんですよ。どうしても一緒にいきたいと言つて、ズボンにくっついて来る草の実だつて居ますよ。落葉をどけて御覧なさい。はずかしがつて逃げる小虫も居ます。皆んな僕の友達ですよ。僕は、こんな生活を小学校の三年まで続けました。本当に楽しい毎日でした。でも父の仕事の関係で、東京の方に出て来なければならなくなつてしまつたのです。父に『東京に行けるぞ』と言われた時、驚きの後で何とも言へぬ切ない感情に襲われました。現在の所に落着いてからは、林の中を歩き回つた昔が、無性に懐しく感じられるのです。その反動か、僕は、東京に出て来てから、以前以上に孤独を好み、自分の殻にとじこめる様に成つてしまつたのです。そして一人で林の中を歩き回る自分を、ロマンチックな自分を想像しては、自分自身を慰めていました。でも、夢は夢、想像は想像です。実際に鳥と話をすることは出来ません。夢の中に居るだけでも楽しいのですが、ふいに僕は、旅に出たいという気持が強まるのです。中学の二年の時に、ノートに書き留めておいた。こんな文章が有ります。御紹介しましょう。

アア、旅に出たい。一人で、誰も居ない所へ。一人で自然と戯れたい。鳥の声を聞きながら。歩いてみたい。一人で、倒れる迄歩いてみたい。自然は僕を拒ばないだろう。かわいい奴だと思つて、抱いてくれるかも知れない。野良犬が出て来て、僕の隣で横になる。リスが、頭のすぐ上の小枝で、小さな目をクリクリさせながら僕を見ているんだ。キツネやたぬきが、木陰から僕を見ているんだ。で

く輝く雪が、夕焼けの色を映してあかく照り輝いている懐しい故郷でした。私が中学校時代の大半を過した古い灰色の鉄筋校舎は、深い緑のヒマラヤ杉に囲まれて、時を告げる時計台の鐘と共に、誰もいない事を物語るかのようにいつも澄んだ音を響かせていた。

あの日、あわたたしい夕暮の町の雑踏とはまるで別世界のように屋のざわめきや笑い声の消えた校庭には、誰の影もうつりはしない。淋しいくつ音だけが、あたりにこだましては返つてくる。丘の上の白い十字架に雪がまい始めた。窓ガラスは冷たく冴えた光を反射させてキラキラ光つては、私の目に痛いほど飛びこんできました。その窓辺にも、思い出をさそうかのようにチラチラと白い精がちらつき始めた。あの窓で、一生けん命ありし日の友達と肩をならべて学んだ事もあったのだなあ。その友は、今はもううちりちりになつて誰も私のそばにはいないけれど……。

まいおりの白い雪のために白くぼうーと校舎をてらします。いつのまにか、茜雪は消えて、遠く山々もベールをかぶつてしまつた、体育の時間に仲良しだったこの鉄棒も、白くうつすら雪をかぶつて姿をかくそうとしてゐるかにみえる。もみの木の間をぬけて広い道路に接している校門には、私達が入学の時に植えた桜の木が寒そうに雪をうけて小枝がぬれていた。この下の青い草にすわつて、友と時間の過ぎるのも忘れて、話しに花を咲かせた遠い日もあったつけ。今考えると、つくづく懐しいと思う。

下を流れている川の水を、橋のらんかんからのりだしてみてみると、夏この水がプールに注いで、暑い日に思ひっきりさわいだ事も目に浮かぶ。私の担任だった先生も、今は他の学校に移られて、

も彼等は決して恐れているのではない。『僕が出て行ったら臭がつて、則ちゃんは逃げてしまふんじゃないだろうか』そう考へて出て来ないんだ。かわいい奴だよ。僕が口笛を吹くと、鳥がいっぱい集まつて来るんだ。回りの木の枝が、折れそうになるんだ。僕の口笛に呼応し、小鳥が歌うんだ。楽しいだろうな――。

この文章は過去のものです。でも、現在の僕の体の中には、まだこの文章を書いた時の感情が脈を打っているのです。生命を受けてからわずか10年余りで僕の性格がほとんど決まつたのです。それも、林の中を一人で歩いている内にです。放浪の詩人若山牧水の『幾山河……はてなむ国ぞ、けふも旅ゆく』が頭に浮んで来る時、僕も寂しさのはてを求めて旅に出たい気持になるのです。

ある日の思い出

一年 加藤 寿子



冬の木立をふるわせて、木枯らしが吹きぬける。そのあとを追うかのように、枯葉がカサコソとさびしい音をたてながら風に舞っている。青い空につき出している高いこずえのてっぺんの、一枚のプラタナスの葉が、今にも風に吹き飛ばされて、遠くに吹き上げられるのをけん命にこらえているかのようにみえる。

そして、私の胸に浮かんできたものは、遠くの連山の頂きに、白

すべてが以前とは変わってしまった。ただ、雪の中に深い影をおとしている灰色の校舎だけが、今もなおかわることなく、その姿を朝な夕なに、ヒマラヤ杉の間から姿をのぞかせている。明かるくともる外灯にてらされた雪の道は、このままだとどこまでも果てしなく続いて、永遠に帰らぬ旅路のような気がしてならない。雪にうずもれるようにして歩いていたら、遠い日の思い出が、又よみがえってくるかもしれないと、そんな夢のような事を考へて、私は一人どこまでも歩いていきました。

それはある日の、私の小さな思い出の追憶でした。

僕の考え

三年 狩野 秀夫



男の使命・それは強く生きる事、女の使命・それは美しく生きる事、人間の使命・それは正しく生きる事、若者の使命、それは未来に向かつて前進する事。

美しい女性が恋をするのではない、恋が女性を美しくするので。美しいのが女性のたつた一つの取り柄、それにまどわされ恋をする、愚かなつまらない、幸福な男。

恋愛の終着に結婚を得た男は幸福だ。失恋を得た男はもっと幸福だ。何故なら彼にはもう一度あるいはもっと恋愛する権利を考えら

れるから。

心の糧であった清き水

愛し過ぎた為か、もはや強い酒と化した。
人間は元来弱いものだ。

それを強くするのはその人の信念だろう。強い男が強い信念を持つのではない強い信念が男を強くするのだ。

人間の最大の長所

それは限界を知ろうとしない事。

人を知るにはこのチャンスに観察せよ、旅行中、恋愛中、買物中、飲酒中、それに食事中。

友を助けたくば友を見放せ。

子供が親に対しての義務

それは(人間的に)大きく成長する事。親が子供に対しての義務それは夢と自由を与える事。

青春の謳歌若者達には権利であり義務である。何故ならそれは人生の学校であり、限られた期間に卒業せねばならないから。

二人の若者が何かをやらした。一人は成功し自信を得て進歩した。一人は失敗し反省を得て進歩した。

先生を目標としたなら、先生以上は元より先生に追いつく事さえ不可能だろう。

山道には大小の石がある

しかしこの石にこだわって居たなら先には進めない。

欲望、これは完全な男にはない。完全な男これは人間ではない。

男の生きる道、果しないものだ。自分の向かおうとする道を前進

私のどこかでもえ続けるだろう。

そっと、とびらをあげましょうか。

夜空に宝石をちりばめたような小さな星が見える。

別れた友も懐しい人達も

今頃は何をしているのであろうか。

時計の音が夜の静けさの中に

大きく小さく波紋をなげる

時間だけがあわただしく過ぎようとしている。

あの時のみんなはどこへ行ってしまったの

私はたった一人ぼっち

遠い遠い夜空の彼方に青い光が見える。

あれは何かしら?

じっと見ているとすいこまれてゆきそう

あたりの木々はひっそりと息をひそめ

星間のそよぎは今はない。

風にふかれて草がゆれたためかちらつと影が走った、ほんの一瞬だが……。

どこの窓を見ても固くとざされている。

今宵は夜と語ろうよ。

星が光をなげかけて

夜のランプが消えるまで

する事自体から幸福を発見出来る者は一生かかっても幸福も成功も得られない。

幸福を求めずして幸福を得たいとは虫が良すぎる。幸福とは待つて得られるものではない。造り出すべきものである。

王様には王様の幸福と不幸が有り、百姓には百姓の幸福と不幸が有るそしてその量は等しい。

愚痴とは無知からの逃避に過ぎない。

現在出来る事をやろう。

明日はきつと出来ないだろう。

何故なら

明日には明日の仕事がきつとあるだろうから。



夜の随想

一年 加藤 寿子

唯もない夜のしじまの中に

青い星明かりがそっと窓べに近よる

きらめく真珠のように

ささやかに燃え続けるあの灯のように

思い出は古い日記帳と共に

深く胸にやきつき刻みこまれ、私がいなくなれないかぎり



一番幸福な奴

一年 大堀 晴哲

「肺結核ですね」がっしりとした体つきの、白衣を着た男が、亀甲の眼鏡越しに、眼をきらきらと輝かしてぼつりとそうつぶやいた。「良くて、あと三ヶ月。悪くすれば一ヶ月位しか持たない。」その男は、吐き出す様にそう言うのと、回転する金属椅子のギギッという音をさせて机に向き直り、上にあったカードに何か書きつけた。「処置なし、家で余生を過ごさせよ。」

「ただいま。」征彦は、彼を心配そうに見守っている母親に言った。「母さん。俺の命はあと一ヶ月だよ。ハハハ……笑わせやがら。俺があと一ヶ月何かで死んでやるもんか。……ハハハハ……。」彼の笑い声は、次第にゴホッゴホッという咳にかわってゆく。「俺は……肺結核だ。」彼は、直も咳をしながらふすまをすうと開けてそこに敷いてあった布団の中に潜り込んだ。けれど、その咳払いと寝返りを打つ者は、いつまでも続いていた。彼は布団の中で泣いた。敷物や枕が、ぐしゃぐしゃに成る迄泣いた。そして考えた。

「俺は一月なんぞじゃ死なんぞ。いや死んで成るもんか……しかし俺は今迄『自分』という精神・肉体・個体の内で、その主体となるものは精神だと思って来た。それなのに俺の肉体は、勝手にバクテリアなんかになんかに負けやがって。何故だ。俺には判らない。俺の精神

は、肉体に打ち勝つ事が出来ない程ひ弱かったのだろうか。何もかも判らなくなってしまった……。あと一月……。寝よう。そんな事考えても、俺の命が伸びる訳でもなし、却って疲れて、縮めるだけだ。」黒い雲かふわっと立込めて、間もなく彼は眠りに入った。直も涙を浮べて。

彼はもう大学三年であった。二年程肺結核の治療の為、進学が遅れ、それが彼にとって唯一のコンプレックスの原因と成って居るのは確かであった。しかし彼からして見れば、そのコンプレックスを素直に感じ取るという事は、彼にとっては、わずかに彼が持っている。彼の自尊心を傷付ける結果を招く事に成るのであり、それがおそろしく怖い事に思えたのだ。彼に健康な肉体こそ無かったが、何にも況して彼の支えと成る彼の精神があった。彼は肉体に於けるコンプレックスを精神の奥の誰にも触れる事の無い所へ仕舞込み、そして何時か忘れていた。いや忘れようと努めて居た。その事が意識に戻ら無い限り、彼は、彼の精神を最も誇るべき学業成績と同様に、おそろしく誇示し、自慢に思っ居た。彼の友人達は、それは友人と呼ぶには、余りに貧弱ではあったが、彼のそういう態度に少々の面映ゆさは感じて居ても、その態度の堂々とした風格や、自分には出来ない英雄的趣向に一種の羨望を感じ、彼を尊敬させる迄にも、それらは至っていた。彼はそんな自分の態度に満足を感じると同時に、大きな、何かとてつもなく大事なものが足り無いといううろたへた気持ちを隠す訳には行かなかった。彼はそれが何なのかと探した求めた。十数年来にもなる探検であった。そして今日、初めてあの亀甲の眼鏡越しに光る眼から察した。彼は、それを自分の肉

成し得なかった。保然と座して居た。

教師がやって来た。その白髪混りの頭を目まぐるしく動かしながら、その教師は、もう征彦にとっては何の意味も持た無くなった記号や数字や文字を、ズラズラと書き並べた。彼には征彦の気持ちなど、判るはずも無い。その内、征彦の方を振り向いて、「安田」と呼んだ。優しい声であった。皆が征彦の方を見た。しかし返事は聞こえなかった。「安田、聞こえんのか？」教師は繰り返した。

「安田、返事をしろ！」征彦は突然、つと立ち上ると、黒板のある方に向って歩いて歩いた。そして黒板拭を握ると、教師の頬その塊りで、嫌と言う程殴りつけた。「アハハハ……」彼は、皆の突然とした顔をよそに、その部屋をフラフラした足取りで出て行った。彼は夢中だった。一体俺の命をあとの位だと思っていやがるんだ。俺は皆と違って、後一月なんだぞ。あんなつまらない講義が一体今の俺の、何の役に立つと言なんだ。あと一月。俺は、必ず何かをしてやるぞ。絶対に！ 皆の出来ない何かをな！ そんな捨鉢な気持ちに成ったのは初めてであった。いや、今迄にあったかも知れない。しかしこんなにも素直に、じわじわと渴いた土から清水が湧き出る如く、強く、痛い程に感じた事は、恐らく無かったに違い無い彼にとって、それを感じ取る事は、もう自尊心を傷付ける事でも、自分を英雄的地位から引きずり落す事でも無かった。彼は現在、感情の塊りと成って居たのである。彼にとって、それに成り切る事は困難な事であった。しかし「死」というこの瀬戸端が、彼に常時も感情的と成る事を押さえつける『なにか』を追ひ払って居た。彼は現在、嘗て味わった事の為の小気味良さを感じた。そして、その中

体なのだと思ひ込んだ。自分の肉体が、俺を自分自身の行手を阻んで居る。俺にとっては何にも況して大切な俺の精神が、俺自身の肉体に妨害されている。そういう風に考える事を彼は歓迎しなかった。しかし彼にはもう頼り見る余地は無かった。彼は猶且つ「うろたへ」を感じた。そして、それを忘れる為に、彼自身の肉体を憎む事に没頭した。

朝が来た。いつもの様に征彦の母親は彼を起こしに来た。しかし彼は、今更学部に行く気にも成れなかった。彼は、母親を怒鳴りつけ、テーブルを引っ繰り返し、茶碗や、皿や、そこらにある物を事々く投げつけたら、彼の気持ちがすっきりするかも知れないと思つた。哀れな事に、この平凡にして、息子を溺愛して居る母親は、その対称と成って居る息子から、憂鬱を晴らすいいにされていたのである。彼は大きな口を開けた。しかしそれは深呼吸となって消えた。彼の理性が乱暴な行動に移させる事を許さなかったのである。

彼は黙って布団をはね上げると飯粒を口に運んだ。

八時の時報をラジオが告げると、彼は反射的にち上って、そのアパートを出て行った。恰も、何の要りも無かった様に。彼は別に、そこに向かうという意が志あった訳では無いのに、何時の間にか学部への道を歩んでいた。彼はバスを待った。七分程して、人影のまばらなバスがやって来た。彼はそのバスに乗って、T大学工学部前で降りた。彼は講義室へ入って行き、座った。彼の友人達は、彼が常時と違って、余りにも静かであり、且つ又無気力であるのに驚いた。友人達にとって、彼がこんなにも陰気であるという事実は、恰も天地が引繰り返るが如く受け取れたのである。彼は本を開く事も

に完全に切り切って居た。

それから毎日、彼は学部にも出ず、家に停って机に向い、時間と自分との戦闘を繰り返した。何日も、何日も……。

征彦の親友と見られていた男が、玉川上水から溺死体と成って発見された。それから八ヶ月。その事件は迷宮入りと成った。

征彦は悔んだ。彼が殺した男は、実の所、彼の立場から見れば親友でも何でもなかった。その男はただ彼に取りまわって居た。代表的な男に過ぎなかったのだ。彼は、家に引き込んで以来ずっと考えた。何かを、何かをやってやれと。そしてこの人生の瀬戸端に臨んで居ても、過去にこだわっていた。そんな俗世間的な垢から抜け出られ無かった。彼は頼り見た。一番嫌悪を感じた人物、つまり、彼の大学での人望の厚さを利用して、彼に媚入って居た男、彼の親友と呼ばれていたを殺したのだった。そして、その罪悪感を、彼はもう少し死んでしまふのだという言葉で誤魔化して居た。が、彼は死ななかつた。彼は苦しんだ悩んだ。もう既に八ヶ月になる。医者の言った事からすると、もう疾く死んで死んで良いものなのに、彼は考えた。俺の肉体と精神。またもや分裂してしまった。俺は、今では早く死にたいと願っている。それなのに、この肉体の奴は、ああ俺は気が狂ってしまふそうだ。彼は毎日、殺された男の霊と共に悩んだ。其の男は、激しく彼を罵った。彼は閑に其れを聞いて居た。其んな討論が、何回も何回も繰り返された。今日これを。明日はあれをと……。

「不思議ですねえ。良くこれまで持ち堪えられましたね。けれども絶対に体を動かしては成りませんよ。」医者が言った。征彦は咳を

しながら、やはり自分は死ぬ運命にあったのかと改めて感じ入るのだった。そんな諦めの気持と同時に、一種の安定した、落着いた安堵感を感じてはとした。ああ、俺の肉体と精神とは、やっと合致した。各々に大事な役目を持って居る肉体と精神。しかし、もう俺は、英雄を気取る事もなく、自尊心や、精神に気を使う事も無へ俺を動かせるぞ。俺にとって一番必要であって、そして得られ無かったのは、俺の感情だったんだ。俺は誤解して居た。俺の肉体に、俺は何の劣等感も抱く必要は無かったんだ。俺の求めていた、からっぽな所に埋るべきものは、俺の、俺自体の、誇りにして居た、厚い壁で被って置いて傷付く事を恐れていた。その壁があるからこそ得られなかった……俺の精神だったんだ。胸の右方の当りから赤いどくどくとした、熱いものが込上げて来た。そうして、其れは咽喉をぐうと通って、二本の細いレールを流れる清澄な露の玉と共に体外に運び出された彼は。その瞬間、深い焦りと、ほっとした気持と、自分が幸福である事を感じた。臉が真赤に成ってゆくのを彼は感じた。

この世は終わった。



めに男船客は死を覚悟しなければならなかった。それにもかかわらず男たちは実に悠然としており、船員とともに救助作業に勤んだ。これらのことをテレビ画面は伝えた。

そのヒューマニズム溢れる画面を、ぼくは眠さでショボショボする目で見とらえた。が、頭は別の働きをしていた。半分眠っている頭の中の移ったドラマの登場人物は、ぼくを舞台としてドラマの上での役とは別の役を演じた。

◇

有名な金融業者の息子ジョージは、妻マリ、実弟ハトソンとタイタニック号の一等室で快適な船旅を楽しんでいた。

事件のあった夜、三人は一等スモークルームで他の一等船客と銀色の正確には、薄風色に銀の輝くウロコがまぶしてあるテーブルを囲んでカードに興じていた。天界の星が集まって創り上げた芸術品のようなシャンデリアの下にそんなテーブルが他に幾つもあった。ステージでは船会社専属のバンドがジャズを演奏し、華やかな雰囲気を感じたてている。

ジョージの様に座っている宝石商（彼の頭は六〇ドルの商品として充分価値がある）はカードを片手にさつきから一人でしゃべりまくっている。「写真の土産にと思って買ったんじやが、さあ次はあんたじや、（テーブル上のブランドを一含みし）まあ、りっぱな船じやなあ。いや、船とは思えん。まるでホテルじや、少しも海の上にいる気がせんからなあ。それにあんた、わしやあこれに乗ってから随分とエライ人と話することができてなあ。ホラ、O博士を知ってるかな。おとといじゃったか一緒に食事をしたんじや。わし

名優

一年 大津 佳明



夏休みが終わってから一週間ほどたった日のことである。夜の九時半頃に『あなたは目撃者』というアメリカのテレビドラマを見た。これは、昔にあった有名な事件をあたかも実況中継しているように見せかける番組で、その日は「タイタニック号事件」の中継をやっていた。

——イギリスのホワイト・スター会社の客船で、その当時（一九一二年）としては世界最大、しかも最も豪華であると云われていたタイタニック号が、内外の知名人をその一等客室にのせてサザンポート港を出帆、ニューヨークに向けての処女航海の途中、午後十一時四十分、ニューファンドランド沖合で浮流氷山に衝突して、二時間四十分の浮遊後沈没した。この事故で船内人員二〇〇〇人中一五〇〇人の犠牲者をだし、世界最大の海難事故とされている。これを「タイタニック号事件」という。

事件に際し、白ヒゲの老船長がいかに沉着冷静だったか、船員がいかに責任感が強かったか（例えばある船員などは、自分の身の危険をも顧みず船底の客を救命ボートまで誘導しようと努力した——しかし、それは不可能に近かった）また、船客がいかに紳士的、貴婦人的だったか（数少ない救命ボートへは婦女子を優先し、そのた

のことを良く知っておられてなあ。」ジョージがいつもの通り笑顔で相づちをうとうとしたとき、突然船の前方でガリガリと異様な音がし、ブランドのグラスが全部転がり落ちてしまった。幸い床は厚いフワフワしたじゅうたんなのでグラスは割れずにすんだ。今までのさわめきや哄笑がピタリと止み、スモークルームは、何が起ったんだ、何かしら、というささやきや不安で一杯になった。が、この不安の満ちた中で、ジョージは落ち着いてこぼれたブランドの処置をボーイに命じた。そしてこう言った。「僕が様子を見て来しよう。」みんなが自分に満足していることを感じ、ジョージは自分の行動、言葉の全てに満足した。彼は張切ってデッキに出た。三等客室では——

一等客室に比べ三等客室はあまりにも貧相だった。ここではシャンデリアのかわりは安っぽい電球がぶら下がっており（裸電球でないのでまだしもの救いだった）クッションの良きく個室のベッドのかわりに二階ベットが船底にズラッと整列している。（世界一豪華なのは、二等だけで三等は他と同じだった）それまで乗客は頭を並べて眠っていた。しかし等級に関係なく「不安」だけは平等だった。人々はすぐさま起き出した。デッキには「どうしたんだ」とささやく人たちがかなり見受けられたがタイタニック号の巨体は何事もないようだった。不沈艦なんだ、という安心感が、老船長や一部の有力船員を除いた大部分の乗船員の不安感にとってかわった。夜の北極海の寒さに震えているデッキの人たちは急いで自分たちの船室に引きあげた。「何かにちよっと触れたんでしよう。でも大丈夫ですよ。何しろ世界一大きな船なんですから。」ジョージはにこ

やかにそして落着いた口調で言った。自分を見る目が自分の余裕を欲していることを無意識的に感じ取ったからである。他人の目を気にすることは良くないことだと世間で言われているから、それはあくまでも無意識的だった。スモークキングルームは再びざわめきと哄笑とジャズの音で満ちた。

デッキでは興奮した人々がオロオロしていた。浮流水氷と衝突しそれによってできた船腹の裂け目からの侵水で、船はあと一時間もつかもたないかの状態である。と船員から報告されたからである。そして婦人は早く救命ボートに乗るようにと命じられた。ここでも身分差別は行なわれた。一等船室には有名人、社会的身分の高い人が多く、乗船代もたくさん払っているのだから、婦人を救命ボートに乗せるときには一等船客が優先された。社会的地位、有名度によって命の価値が決められたのだ。そのことに関し、ジョージは別断疑問を感じなかった。にもかかわらず、彼は常日頃から「生命は平等であり敵愾な物である」と強く意識していたのだった。彼は多くのヨーロッパ人がそうであるようにキリスト教信者だった。ボートは船腹に鎖で吊られてあり、デッキと等しい高さには置かれていた。いつもはやかい物であるこの小さな、そして僅かしかないボートが、そのときは実に頼もしく見えた。ボートの傍のデッキでは夫婦、親娘、兄弟が互いに別れを告げていた。

「あなた、きつと助かってね。」

「安心しなさい。」

ジョージとマリーもみんなと同じことを言い合った。胸が一杯になって、マリーなどは涙を浮かべていた。ジョージはふと、先月見

けて飛び降りた。男は船底に膝小僧を強くぶつけ、そして中年の婦人の上に引っくり返ってしまった。しかし彼は無事だった。その衝撃でボートは上下左右に大きく揺れ傾いた。波がボートの側面にぶつかりはね上がり婦人たちが飛びかかってきた。

ベン・ケーシー、これがその男の名前だった。彼は有能な能外科医で正義感に燃えたヒューマニストとして知られていた。

船の女たちは一せいに——何の興味物もないバスの中では大きなアクビでさえも注目されるがあなたもそのように——ケーシーの到来に注目し驚いた。

そして自分たちの現在の生きがいを見出したように彼女たちの目は光り出し小さなおしゃべりを始めた。それはケーシーを蔑むような話題だった。ケーシーはつらかった。——船に残れば確実あの世だ。今は冬だ。凍え死んでしまう。オレは助かったんだ——という喜びを隅に追いやるほど、生命の危険のない彼にとって憶病者だと思われるのはつらかった。つらさを紛らわすためにケーシーはこう考えた。——オレは有能な外科医だ。オレの命はオレだけの物じゃない。オレはこれから何人も、いや何十人も人の命を救えるんだ。それにオレのした事は船に残った奴よりもっと勇気がいるんだ。残った奴らは体裁ばかり気にして本当の自分が出せないんだ。

みじめな心で意気高く考えたケーシーは、この考えと交差して、彼の古い友人のジョーンズ大尉の言葉を思い出していた。

激しい闘いの最中脱走し、捉まり、大尉の前へ引き出された彼の部下が、自分は本当は勇気があるんです、と今のケーシーと同じよ

たすれ違い映画の主人公二人が別れ別れになってしまふ場面を思い浮かべた。二人のすぐ側は、感激したハトソンが小刻みに体を震わせながら立っていた。いよいよボートが海面に降ろされるときになって、突然、私もあなたと一緒にこの船に残りたい、と言いつつ老婦人がかなり見られた。彼女らの全ては夫や友人に説得されてしぶしぶ船員の命令に従った。そんな老婦人を横目で眺めながらマリーは発作的に感動的な言葉を口にした。「私、やっぱり残るわ。あなたを残して私だけボートに乗るなんて……」彼女は映画や苦居で何度もそんな言葉を耳にした経験があるのでつかえずにスラスラ言えた。しかし言い終わって咄嗟に、しまった、もしこの人が私の言葉を真に受けて残ってくれて言ったらどうしよう。そのとき私は……、という考えが彼女の頭をかすった。しかし、彼女は心配性な女だった。

自分の命が一番大切だと思っている男も多勢いた。船腹に吊されたボートの中に女子供とまじってうずくまる彼らは、船員たちによって片っぱしから引きずり出されてしまった。ギアギア暴れる男には拳銃が向けられた。

マリーと別れを告げたジョージは、ハトソンやその他の紳士たちとこの引っこ抜きを手伝いながらある種の快感を覚えた。それは優越感からだけではなく、悲しみや自己卑下やゲームをしているような輪介さの入り交ったものだった。

ジョージの手伝ったボートは婦人一杯になったので海面に降ろされることになった。ボートが船腹からはずされ、鉄の鎖でガラガラと甲板から海面に降ろされたときに、突然一人の男がボート目

うなことを言ったことがある。その部下は処罰されたがその後で、連隊一の猛者である大尉が、従軍医として来ていたケーシーに言った。

『ああいうヤカラは本当に困りもんだ。自分のした事を何とか正当化しようとするんだからなあ。勇気のある行いがきんもんだから、考えて、理屈でこようとするんだ。『思考』という砦を築いて高尚な自尊心を傷つけないようにもぐんだ。もっと酷いバカ者になると、逃げ出さない奴は体面ばかりにとらわれた小心者だってんでそれで逃げ出しちまいやがる。そのお陰でこっちは自分の考え通りにできない小心者になっちゃう。まったくこういうインテリ面したバカ者は手に負えんよ。』

ケーシーは自分が大尉の「部下」ではないだろうかと恐れ、苦しみ出した。しかし恐れても苦しんでも彼はもう憶病者という烙印を押されてしまっていた。

ボートは本船沈没のときにできる渦巻に巻き込まれないように本船から遠く離れた。ケーシーを軽蔑することによって勇気づけられた婦人と、軽蔑されたつらさを弁解的な思いで紛らわしている男とを乗せたボートは、流水を浮かべた、静かな、真黒一大海原を漂った。その上を北極の凍っていついた夜空がどこまでもどこまでも広がっていた。

ボートに飛び降りたのはケーシーだ、とジョージはすぐに分かった。ジョージは自分に満足するとともにケーシーに対して僅かな嫉妬を感じた。それは余り僅かすぎてジョージは気づかなかった。

ジョージのすぐ側で指揮を取っている老船長の処に、一等航海士

のスマイスが報告をもってきた。

「船長、浸水は機関室にまでおよび、本船はあと三十分ほどの寿命だと思われます。」

「よろしい。……救命ボートへの誘導をもっと急ぎなさい。そして私の最後の命令があるまで各人が自分の持場に対して責任を持つように通達しなさい。」

顔色一つ変えずにこう命令する船長を前にしてスマイスは自分を冷笑した。

——オイ、ボートから逃げないのかい。国にはかわいい家族がいるんだぜ。ちよいとボートの処に行つて『婦人たちだけでは危険だからわしがボートを操ろう』つて言つて乗り込んじまえばいいんだ。……しかし……しかしわしは一等航海士だ。わしの身分がそれを許さん。助かつたワシを捉えて世間の人は非難するだろう。だけれどわしに比べてこの船長はなんと偉いんだろう。

スマイスはりっぱな船長を見るまで、ボートに乗るか本船に留まるかを決めかねていた。彼はいつの場合でも、他人を見て自分の行動を決め、その価値を判断した。

疲労の色濃い老船長と実直な一等航海士を身近にし、ジョージは新たな勇気がわいてきた。そして自分も彼らの様でなくてはならぬと思つた。

タイタニック号の船首は大きく伸び上がり、船尾は深く海面下に沈んだ。もう十分もつまい、ということとは誰の目にも明きらかだった。般がひどく傾きジョージとハトソンは立っていられなくなつた。で、床に固定されてある長イスに座つた。ジョージの目には落

ち着きを失つて騒いでいる人たちの姿が映り、耳にはバンドの演奏する聖歌が聞こえてきた。

——あの人たちはどういう積りで演奏しているんだろう。死を目前にしての聖歌の演奏。きつと、後日、感動的な物語として世界中の人に伝えられ世界中の人を感激させるだろう。

ジョージはふとこう考えた。が、その考えはそれ以上発展はしなかった。そんなジョージに青ざめたハトソンが相談した。

「兄さん、海に飛びこもうよ。このままじつとしていたら般もろとも海の底に巻き込まれちゃう。」

兄弟のまわりには、血相を変えて救命胴着を奪い合い冷たい海の中に飛び込んでいる人々が多勢見られた。救命ボートはもう一隻も残っていなかった。

「どうせ凍えるような海だ。飛びこんだつて三十分で終わるさ。僕たちも男だ。あんなにあわてずにはりっぱな最期を飾ろうじゃないか。」

この言葉は実直單純なハトソンを感激させるのに充分だった。二人はそのまゝのかっこうで黙想した。

永遠の旅路への直前、ジョージは彼の廻りの人々の恐怖に引きつった顔を見まわした。彼らの頭にあるのは「無限な時」に対する恐れだけで、自分が今どんな顔をしているかなどというを気にする余裕はないように見えた。狼狽する彼らを見てジョージは自分に誇りをもつた。

地獄への瞬間、般は海面に対して垂直に立ち上がった。

恐怖にばかりとらわれて自分の勇気に注目してくれない紳士たち

に一片の不満を抱きながら、最高に着飾つたジョージは般もろとも暗く、冷たく、重い海底にうずまきながら沈んでいった。——完——

一年 山崎 朱実

葉桜の 道を急ぎし

登校す

葉桜の 下は清しや

息深し

星空や 梅雨はれ今日を

願みる

雨後の 道月光々と

晩夏かな

夕暮れや 柿の実一つ

葉なき木に



三年 井出 三郎

亡き姉に 聞えてくれろ

蟬の声

線香に まかれて落ちろ

鳴く蟬は

姉亡きに 父母泣きて

我泣きて

一年 山崎 朱実

早朝の桜散りけり早足の

われ登校す清々しさや

教室の窓よりながむ快く

桜散りゆき日暖くして

肌寒き朝の並木の空青し

飛行機雲の高くかかそり

こみゆきて朝の電車の車窓より
線路の傍の菊の咲く見る

離れゆき我等寂しき日々なれど
吾忘れまじ楽しき思い出

クラブ報告

化学部

松高の数あるクラブの中で、最もアカデミックなのが私達のクラブである。

現在の部員三十数名、二名の顧問の先生のよき指導のもとに、より充実したクラブにしようと努力している。

今年の活動をふり返って見ると、四、五月渡って基礎実験を行いました。

その内容は、水素、酸素の発生、金属イオンの検出、さらに松高附近の水質検査を行いました。

社会科学研究部

私達、社会科学研究部(社研)は、三年生創立の新しいクラブです。しかし、当時はまだクラブの基礎もなかったことと、種々の制約のため、三七年四月廃部となりました。しかし、この廃部によって松高社研は生まれ変わったのです。

廃部当時、残った部員で深く自己批判を行い、ただちに、社研同好会を結成し、社研部再建に着手しました。この間同好会員はわずか二名を数えるのみでした。しかし、同好会ながら、社研再建の意志は固く、一学期は日本の憲法を中心に研究し、二学期には、同好会ながら、文化祭に「都市の底辺」という展示参加をしました。三学期には、聖書研究同好会、図書委員会などと、活発に読書会を行い、ついに三月には、機関紙「るつぽ」を発行するに至りました。この「るつぽ」発行に、不活発な他のクラブを多に刺激し、結局、これらの地道な活動が認められて、奇跡的に、三八年五月十七日、一年ぶりでクラブに復活したのです。(これまで、松高には、一度廃部となったクラブが、復活したことはありません)

さて、新生「社研」は、廃部という、苦しい経験の結果、それまでの狭い、部員だけのクラブという考えから、広く松高生徒全体のクラブという立場で、活動を行うようになりました。具体的に、三八年度の活動をいいますと先に発行して問題となった。機関紙「るつぽ」の批判会を行いました、これは、社研の意見に対して、一般

この基礎実験は、新入部員にとっては、これからの実験の指針となり、二、三年の部員は基礎を今一度確認し、いわばこれはウォーミングアップ。

六月から自由研究に入って二、三人のグループに別れて、各自の個性を生かして、秋の文化祭を目ざして、研究を行いました。

夏休みには何日かは登校して、ふだん時間の関係で出来ない実験をしたり、工場見学に行ったり、また野山にレクリエーションに行ったりして、チームワークの育成に心がけた。

秋は文化祭の一言につきる。我々文化部にとって文化祭は盆と正月とが一緒に来た様なもので、部員が一体となって、実験や展示の準備に夜おそくまで取りくんだ。

何と言っても文化祭は一年間の活動の山場であり、それだけに印象深いものであった。

さて文化祭が終わると、肩の荷がおりたと言う安心感から、活動が例年停滞ぎみとなるので、この時期をフルに活用する為に、一年間の活動の総決算の意味で、部誌「舎密(セーミ)」の発行準備にあてた。これは、約四十ページに渡るもので、他のクラブに類をみない様なものである。

以上が今年の活動の概観であるが、我々部員は「化学」という未知の物に對り常に限らない真理愛と探求欲を持って、接しています。しかし、だからと言って決してむずかしいものではなくて、上級生が下級生を教え導きながら、実験を行っていくという、ほほえましい光景がいたる所に見られます。

の生徒と話し合う目的で、行なわれたもので、新たに松高生となった一年生十余名を初めとして、三十数名が集り、活発に話し合いました。続いて、新入生歓迎の、新劇鑑賞会を主催し、芸術座の「ラインの監視」を鑑賞し、深くヒューマニズムの大切さを知りました。

そして、五月一日からは、毎週水、土曜日にテキストを用いて、いよいよ社会科学の研究を始めたのです。一口に言って社研の活動目標は、しっかりした物の見方、世界観の確立ということですが。そのために、我々青年には、なにより大切な、「真理の探究」、つまり戦後問題にされる私達戦後派が、自分で真理を知り、明日を考えるという姿勢をもって、更に、それによって得た真理を、猶断で決めずに、ほんとうに自分のものにするために、「思想の練磨」つまり一人だけで考えるのではなく、みんなで話し合うなかで、形成していくとするものです。(社研新聞月刊「アサヤケ」創刊号より)

この大きな目標に沿って、私達社研は活動するのです。ところで、私達青年には、社会の矛盾に気づき、身の回りの不合理に憤ってはいても、それを感情的に受けてしまいがちであるという弱さがあります。したがって、ともすれば「我ひとり孤独を愛す」というような、良くいえば文学青年、悪くいえば、カラに閉じこもった人間になりがちです。この場合、よくいっても文学青年では、将来が危ぶまれます。今の世の中は、「生馬の眼をぬく」というコトワザにびつたりで、おおよそ、個人の主観的な善意などというものが、通用しないのです。朝に、炭鉱や鉄道の大惨事があったと思つたら、夕には、どこかの国の民主的で名の知られる大統領が、

その善意を憎まれて、暗殺されるという。全く諸行無常の現実だからです。しかし、これだからといって、私達は自殺でもないかぎり、この現実からはのがれられません。ましてや、いくら神仏にすがって、アーメン、ラーメンといっても、多少精神の安らぎは得ましようが、所詮、食べなければ生きていけないという、簡な理屈から、天才になって悟りでもしないかぎり、無理というものです。では一体、生まれた以上、人生を有意義に過ごしていくのには、どうしたらいいのでしょうか？ 答は一つ、各々が各々、純粋な青春の時代に、とことんまで考えて、確固たる自分自身の生き方を、把握するという事です。こういうと「なんだそれなら、宗教と同じじゃないか」という人がいるかもしれませんが、残念ながら、それは違います。それは、次のことから明らかです、つまり、宗教では、この自分自身の「生き方」を把握することを「悟る」とか「神告」を受けるなどといいますが、その実際、悟ったり、神告を受けたという、いわゆる聖者とかいう人が、必ず口にするのは（表現上の差はありますが）私の知るところ、例外なく、何教の人でも、死という前提をもって、生命を論じていることです。つまり、死後の世界を空想した上で、ヤレ浄土だの極楽だのといって、現実の世界のことなど、あまり重きをおかずに、あるのかないのかしれない、いわばかつてに、人間が心で思っただけで作り上げた「天国」などというものの方を、中心に考えているのです。それは「神のものとのみ、真に救われる」という、宗教の根本的な言葉が、いみじくも、おっしゃっている通りです。これでは、現実の世界の悩みの解決にはなりません。つまり「神のものとのみ、真に救われる」と



ならではの素晴らしい、他のクラブを圧倒する。文化活動を行うのです。この文化活動は「松高の文化を高め、青年としての自覚を深めよう」というスローガンのもとに行う、他の高校の社研にも見られない、わが松高社研独自のものです。一つは前にも述べた、進歩的演劇を鑑賞し、その中から学びとる演劇鑑賞会、これは年に二、三回行います。二つめは、毎月行う優秀映画鑑賞会、昨年は主に、独立プロの作品や、カンヌ映画祭受賞作品などをとりあげ、大変好評でした。具体的にいいますと、四月には、独立プロ「裸の島」、五月、カンヌ映画祭グランプリ受賞の「誓いの休暇」、及び独立プロ「蟹工船」、六月、ソビエト映画「鋼鉄はいかに鍛えられたか」と、松竹映画「人間の条件」全六部の一挙上映、これは三十数名が参加する程でした。七月、独立プロ「夜明け前」、九月独立プロ「真昼の暗黒」、十月、ソビエト映画「シベリヤ物語」、十一月、独立プロ「松川事件」、十二月、科学映画「ミクロの世界」などでした。そして、六月十五日には、高校では普段あまり接触の少ない、生徒と教師の交流を計り、相互の親睦を計ると共に、授業では絶体に関けない、各先生方の専門の分野を講演していただく社研文化講演会を主催しました。講演は「現代都市」西山先生「現代数学」峰先生でした。六月二十日には、同じ松高生でありながら、何かと差別される定時制と、全定社研交流会を行い、あらためて、働きながら学ぶ者の現実を認識しました。六月二十九日には、都立青山高校社研を招き、交流会を行なって、多いに成果をあげました。七月に入つて、最初の部会では、あらたに文化祭のテーマを決定し、また、三十八年からは、文化部ながら合宿を行うことを決定し、八月十一日

いうことは、いいかえれば「人は死ななければ、幸福にはなれない」といっていることになります。もし、これがほんとうであつたとしても、現実には我々が、人生の生き方について悩むのは、なにも自分が死んでからの生き方について、悩むわけではありません。現実生命ある人間が、現実実際に起る——少なくとも、起ることが明白な——ことに対して、不安があり、納得できずに悩むのです。したがって、宗教では、死後の生き方をさぐるならいざ知らず、現実に生命ある人間が、求めるものは、得られないということになります。まして、その宗教のいう、死後の世界などというものは、現実の人間は、だれ一人、行つたことがないので、むしろ、そんな死後に、望みをかけるなどという、消極的な態度を止めて、もっと積極的に、今生きている現実の世の中を、どうしたら、自分も含めて、みんなが幸福にくらせるか、考えた方が、生身の人間としては、道理というものです。この道理を学ぶのが、社会科学研究部の活動です。そこで、いわゆる学習会というものを、行うわけです。学習会とは、社会の現実の様々な矛盾が、何故起きるのか、そしてそれはどうすれば、なくなるのか、などということ。また、そこから生まれる、私達自身に身近なこと、個人的な悩みなどを、やさしい社会科学の本を読みながら、先輩も後輩も、全く平等に話し合うなかで、学びあうものです。このようにして、私達は、人に言われて信じるのではなく、あくまでも、自分自身でほんとうに納得のいくまで話し合つて、そして、江して現実に背を向けず、科学的に物事を判断する。積極的な態度をつくるのです。しかし、どうしてもこの目的を達成するのに、学習会だけでは不十分です。そこで社研



より十三日まで、静岡県大瀬崎に、沿岸漁業調査の研究合宿を行い、その結果をまとめて、現在図書室に「社研部三十八年度夏季合宿調査報告紀要」として保存してあります。夏休み中は、その他、文化祭研究発表のために、班にわかれて、水上生活を訪問したり、浅草山谷ドヤ街調査や、炭労会館を訪ずれて、資料を収集したりしました。九月に入つてからは、いよいよ社研新聞月刊「アサヤケ」を創刊しました。クラブで新聞を発行しているのは、松高では社研だけです。

十月五、六日の二日間にはわたり行なわれた文化祭では、なんといつても社研の展示は、話題の焦点でした。テーマは「日本のどこかに——忘れられた貧困地帯」。展示を四つに分けて、社会問題として「水俣病」、都市問題として「スラム」、時事問題として「炭鉱合理化」、最後に問題となった「能研テスト」について、研究発表しました。特に昨年は、見やすい展示ということをもとに、水俣病では写真家桑原史成氏の協力を得て、素晴らしいドキュメンタリー写真解説を行い、太平ムードの松高生をおどろかせたものです。その他の展示も、できるだけ文字を少なくして、写真とグラフ中心に展示したためか、社研の展示会場は、他に比べて、格段に参観者が多く、他の展示会場では見られない。活発な討論がたかかわされました。この文化祭で、広く自分の研究成果に責任をもって、質問に答え、議論するときこそ、まさに最高に社研部員の誇りを感じるときです。このことによって、また成長するのです。そして十一月九日から十六日にわたって、あらたに松高史に、新しい一ページをきざむ画期的な「社研祭」を開催しました。この「社研祭」とは、

松高社研のみがもつ、文化活動の集中表現です。討論あり、芸術あり、映画あり、すべて我々社研としてできうるかぎりの統力を結集して「文化的充実した高校生活を築くために」行いました。残念ながら、開催中、家ダニ駆除の薬が効きすぎて、臨時休校などという非常体があったので、十分に成果をあげられなかったのですが、それでも、社研祭のラストを飾る、優秀映画自主上映会、「太陽のない街」の自主上映画は、生徒のための、生徒自身による校内映画会として、大好評をいただきました。アンケートによると、参加者の八割以上の人が、「今後もしどしやるように」という意見でした。そして、一月二五日、社研機関紙「つば」第三号を発行し、現在に至っております。

クラブのない高校生活は、青春ではありません。社研は、学校の授業では決して得られない、人間的なものを、必ず学べます。高校最大の文化クラブ、真理を探究し、じっくりと自己を認識し自由・平和・平等を創造する。社会科学研究部、社研は、いつまでも全生徒とともに！

一九六三年十二月四日

ザ・ブルーナイツ

皆さん我々の生活に目を向けて見ましょう。するとその中には、そうです。リズム等種々の音楽的要素があります。それほど我々音楽に欠けがいのないものです。悲しみや楽しみ等いろいろな感情



やりました（ここで私達は音楽を合奏すると言ふ事のむずかしさをいやという程味わいました。）又今後の一大目標であるところの「レパートリーをふやす」という事から毎日練習に努めています。そして第二回公演を早く開きたいと思ひ私達は練習にハッスルしています（何がとびでるかはお楽しみ）です。どうぞ「ブルーナイツ」に期待して下さい。私達は皆さんのあたたかい御声援を心の底から希望しています。

会 員 名

・バンドリーダー 崎山純光

清 野 信 一 (2D)	……ピアノ・サクソス
檜 垣 陽 三 (2D)	……トロンボーン
斉 藤 賢 一 郎 (2D)	……トラムベツト
大 島 拓 也 (2D)	……クラリネット
今 井 康 雄 (2A)	……クラリネット
府 川 謙 也 (1C)	……ギター
渡 辺 徹 (1D)	……ドラム
	……ピアノ



をも表現できます（これは芸術一般にも言えますが……）しかしその音楽も我々現代の高校生にとってクラシックも必要ですが、やはり何といってもジャズに魅力です。（中には例外もありますが）そんな事から私達の先輩は「松原高校ジャズバンド同好会・ブルーナイツ」を結成しました。その偉大な先輩の意志を受け継いで現存私達に活動しています。

しかしこんな私達にも苦しみや悲しみ等いろいろな思い出があります。

文化祭の時には、遅くまで残って練習したり、楽符や符面台をいろいろ捜し回ったり、それは大変でした。そして文化祭当日私達は皆小心もの？ ばかりなのでソワソワビクビクドキドキしながら出番をまつたり、アンブのヒューズがなくなっちゃったので捜し回ったりそれは大変でした。

そしてあの魔の数分間？ 私達は夢中でやりました。すると終わった時には拍手が起つてました。「成功！」と私達は皆喜び合いました。又文化祭後三年生が引退したので新人を募集しましたがうまくゆかずどうしようかと思つてた所「ぐずぐずしないで歩きましょ。明日があるんですもん……」という事がある人が言われましたのを思い出して「若さ」と「ファイト」でガンバリました。そのかい合つて現在はいまうまいってます。ここであつと現在の状況を述べますと、会員は二年生五人、一年生二人の計七人です。（他にその他少々がいる。）活動内容は十二月に放送の方から依頼されて座談会に出席したり、数曲吹き込んだりしました。しかしこの「吹き込」が大変で、なかなかうまくいかず何回かのN・Gの後どうにか

山岳回想記

2 年 江 口 和 孝

四月、我が松高のホープ、山岳部は、三年二名、二年六名、一年四名、計十二名で希望を胸にスタートする。一週間とたたないうちに、トレーニングを始める。最初はトレーニングを厳しくやり、新入部員の強さを調べる。

同じ月の二十七日の午后、若葉のもえる門沢山塊へ二泊三日の行程で出かける。雨山峠からの富士山は何んとも言えなく美しい。まだ山肌にベツトリと残っている雪。その残雪の白さと若葉の緑とのコントラストは素敵で、山の雄大さを嫌でも感じさせられる時である。今までの疲れもどこへやらじつと富士を見入った我々です。その夜、キャンプファイアをする。百人近い早大の連中と、たかが九人で張り合つたんだから、いかに大声で歌つたかわかるであらう。沢山あつた薪も燃えつきて火も消えかかる頃には、もうまともな声の奴はいない。

翌日は塔ノ岳へ登り、バカ尾根と呼ばれている。すごく長い尾根を下る。「アーアー、ヤンナツチャッタノ！」

翌日からは単調なトレーニングが続き、体中が痛くてたまらぬ。

六月の二十三日土曜日、憧れの富士山へ行く。まだ時季が早いせいか、ほとんど登る人はなく、我々は物好きの部類に入るのだから

う。

その後はトレーニングも一段と激しさを増して、合宿の為の体力を増強する。

そして八月四日の夜、夏山合宿へ行く。コースは松本・上高地から檜ヶ岳、双六岳、三俣蓮華岳、祖父岳、野口五郎岳、鳥帽子岳に登って大町へ出る。通称北アルプスの裏銀座という縦走コース。

夏の思い出を書いていると、この本の十ページは案に越してしまふので、簡単に書くことにする。

一番美しい所はやはり雲の平だろう。静かで美しく、そしてどこかに神秘性さえ含んでいるような高原。見渡す限りの花、その花の間に小さな池。その池に写っている遙か遠くの方々、そしてボコンと盛り上った所にある山小屋が、いくら歩いても近くなならない様な所である。「百聞一見にしかず」なんて言うから、こんな事言ったって解るわけはない。君も一度行って見たまえ。雲の平へね。

もう一つの思い出。出それは鳥帽子岳の夜である。雪溪の水を使うつもりが、全く使えず、食後のお茶も飲めないとは忙しいね。出発より数えてちょうど七日目、我々は懐かしい都会の雑沓の中へ帰ってくる。本当に新宿の灯が懐かしく列車の窓からながめる。

二期に入るとすぐ、文化祭の分担を決める。時間的に余裕があるという安心感と、去年文化祭を経験している二年三人のうち、二人までが、他のクラブとかけもちで、まともに自分の分担が果せなかったという事が、文化祭失敗の主な理由であろう。大いに反省している。

十一月に入るともうトレーニングは毎日。二十三日より三日間。

と言える。平常はいたっておしとやかな諸嬢(部員は女子の方が多い)、もこの時はかなり大いにハッスルしたのも当然の事だった。十月四日、文化祭の前日である。授業が終って後、美術室に集合した部員は、さっそく室内の整美、飾りつけにとりかかった。二、三年生数名は、生徒作品のうち特に優秀と思われる作品を、風景画、自由題の絵からそれぞれ十点づつ選択した。が、自由題で、抽象的なものには本当に悩まされた。その作品は、何か意図があつて描かれたもの(本来の意味での芸術的な作品)なのかそれともただやたらに色を並べたものなのか、我々には見わけが事困難であつたから。それでも、鑑賞してみてもたしかに傑作だという作品はあつた。それらは、画板にラシャ紙を巻きつけた上に置かれてその上セロファン紙で包むといった、簡易額? にしたのだが、バックのラシャ紙の色と作品とが、なかなか良い効果を現わす事が出来た様である。一方、他の部員は、様々なラシャ紙に、水彩・鉛筆・デッサン等をはって、展示会場である二Cの教室へ運んでいった。これもバックのラシャ紙の色に合う絵を選んだり、縦横の位置関係を考えたりなかなか容易な仕事ではなかった。さて、美術室の方であるが、ここは特に慎重に行なわなければならなかった。二の教室とは違つた。静かで落ちついた。絵をじっくりと鑑賞出来る様な場にしたいからである。室内の北側の窓や、壁に、うすい灰色等の中間色の布をはって、油絵をかけた。その中には一年生及び三年生が、それぞれ五六人単位で一畳大、又は半畳大のパネルを使用して共同制作した作品が三点含まれている。これは、それぞれ異なった各人の個性が、少しづつ弱められ、妥協し合つて完成されるものな

去年成功しなかった、谷川岳の縦走を全く同じコースで試みる。

しかし、吹雪になったので、山の鉄則「危険を感じたら早めに引き返せ」というのを守って、しぶしぶ、後に前進し、谷川岳の頂上附近で幕営。その夜は迄下がった。翌日はどうやら晴間が見える位に回復したので、下山したが、一日は明日天幕がたためなかったら、誰れが連絡に下るか、などという事を真剣になつて相談していたものだ。

谷川岳以来来たい山行もなく、週に三日トレーニング、一日ミートニングというのを続ける。

この本が君の手に届く頃は、春山合宿の計画を立てているであろう。春山は五竜岳を極地法を用いて登るつもりである。

最後に、我が山岳部の大いなる発展を祈つて筆を置く。

文化祭前日・美術部

二年 飛 沢 均

我々美術部員は、油、デッサン等の技法や、自分の腕を磨くのに専念して、普段こつこつと地味な活動を続けている。活動日は定められていない。毎日がそれに当てられているのだ。だから活動は自由に出来る。しかし部員全員が顔をそろえる。という事はほとんどない。従つて、我々にとっては、文化祭が、努力して描かれた我々の作品を発表し、また、部員相互の親交を深める唯一の機会である

ので、出来上った作品そのものは多少、何かアンバランスな感じを与えないでもないが、この制作は、前にも申し上げた。部員間の親交の深化という事を本来の目的としているものなので、そういう意味に於ては、大変有意義なことなのである。また、そのほか、三年生部員のデザイン、諸先輩の数点の作品も展示され、長沢先生の「ある高原の、馬と雲のモチーフによる作品」五点も、黒板を覆った灰色の布の上にかけられた。そして二会場には、純白のラオコーン等の石こう像もおかれて、画展会場らしいムードと変化とが出された。この頃すでに、日も落ちて腹の虫が鳴り始めたので、ラーメンを取りよせて休憩、という事にしたが、これが予想外の大赤字でがっかりした。かけに近いラーメン一杯八十円也、とはまあ……。しかし、胃袋が満たされてからは、がぜんファイトが出た。この辺で一年生の女子は皆帰宅させたが、残った我々はポスターを描いたり、最後の飾りつけをしたりしなければならなかった。が、これは楽しい仕事だった。ポスターにしても、マンガをいかしたり、おもしろく切りぬいたり……。そして最後に、大作を完成させた。階段を上りきった所の臨時においたつたてと、左に曲つた所の壁とをバックとし、また、額縁や筆、紙縄などを材料として用いたもので、前者のバックでは、木ワクのます目のおもしろさを、また後者では、壁の白に浮き出た額縁の輪郭線の変化のおもしろさ、というものを利用して半立体構成したものである。といつてもこれは、別に何の意味もなく、おもしろ半分、傘たての底のブリキ板を壁にたてかけて、ちょっとした湾曲の美しさをみ出したのが、そもそものきっかけであった。しかし、出来上ったその横に、「コンボジン

「コンボジションB」という、ぎょうぎょうしい題名をうちつけたので、練習で遅くなった演劇部の女の子が、「私達にはわからないけれど、これでも何か意味があるんでしょ。」などと感心して見ていたが、これにはふき出さずにはいられなかった。

十時半頃、学芸大の先輩の見事な作品三点がどけられたので、さっそく展示して、一応明日からの文化祭の準備は完了した。

努力の甲斐あって、文化祭当日は、まずまずの盛況をみせた事は、我々美術部員にとっては大いにうれいところであった。

得難い経験

生徒会長 中野 泰之

高校生活において華とも言える二年生時代は、僕にとっては、あらゆる面でまさに得難い年であった。

二年になってまもなく、クラスで生活委員に推された。一年の後期でこれを経験したので、あまり抵抗も感じずに引き受けた。

しかし委員長になった時は本当に困ったことになったと思った。生活委員長などと言う比較的重要な役をこなせる自信は僕にはなかったし、また当然委員長は生徒会の中核機関である総務会の構成メンバーにならなくてはいけないわけで、時間的にも精神的にもその用意が出来ていなかったのだ。だが無責任にも(僕はその時そう感じられた)委員長役を押しつけられてしまったのである。元来生

徒会と言うものに興味をもっていないわけではなかったのだが、とにかく困ったことになったものと、そればかり考えていた。

生徒会に対する興味と言っても、ただ漠然としたもので、中学時代には「生徒会とは口達者な連中が集まってエリート意識をつくりあげる所」とぐらいしか考えていなかった僕である。それに關する知識は皆無と言ってよかった。不安だった。そして生活委員長を無理矢理に押しつけられたことに對する憤然とした気持ちもあった。

一年生の時には、生徒会について友達と偉そうな顔をして批判しあったこともあったが、いざ自分が実際にその運営に携わってみると——どうして俺がやらなきゃなんないんだ!——と言う怒りとも疑問ともつかないものが湧いてきたこれは僕の生徒会に対する認識不足からきたものにはかならない。そしてそれは——よし、こうなったら生徒会活動を通じて、何か人間的な成長に役立つようなものを奪い取ってやろう——と言う一種の打算的なものに変わっていったこういうような気持ちで生徒会活動に携わることが良いことか悪いことかは僕には判らない。しかし、当時の僕としてはそう思うより仕方なかったのである。

とにかく生徒会の中央へ首を突っこむはめに陥ってしまったからは毎日こんな気持ちで生徒会室に入り浸るようになった。

だんだんと活動にも慣れてきた。すると、また生徒会に対する気持ちが変わってきた。今度は自分で自分をこまかす手段に生徒会活動と言うものを考え始めたのである予算作成などで夜遅くまで残り、「学校から家へ通っているみたいだな」などと冗談ともつかないことを言っていた頃は、勉強に対する焦燥感をその忙しさに紛わ

していたのである。完全なる勉強からの逃避行為であった。今考えみると悔いてならない。

生徒会活動に限らず、あらゆる行動において、何かから逃避する為にあるいは、これをした為にこうなったのだと言う理由を作らんが為にそれを行うことほど卑怯なことはない。そして愚でありまたそれほど惨めなことはない。今、僕はそう思っている。

理論的なものも勉強せずに、ただ本能的に自分の前に起った問題に取り組むだけであった僕は、後ずさりしながらやたらに吠えたりしている犬に等しかった。しかし、そのような愚な活動からいろいろなことを感じ、そして考えた。それらは生徒会と言うものにとっ

ては何にもならなかったに違いない。だが僕と言う人間にとっこれは絶対に分かることがないであろう貴重なものだったのである教室やクラブ活動、ましてや家庭生活においては全く考えてもみなかったことを経験した。そこで考えも及ばない僕の無責任さを発見した。不真面目さを発見した。不誠実さを軽薄さを発見し愕然とした。利己主義があった。敗北主義が幅をきかせ利己主義が横行していた。そして、全てが迎合的であった。思想のなさにも驚かされた活動の中で、余りにも若さのない老人の言うような言葉も何回か耳にした。現代高校生の全般的風潮だと言われる無責任さ、事勿主義な行動もいやと言うほど見せつけられた。それは余りにも強烈であった。戸惑った。卑屈な迎合的な態度を積極的に教えこまれてい

る現在では仕方ないことなのだろうかとも思ってしまった。しかし、たまたま生徒会活動と言うものの性質上、それが端的に表われたのであって、教室においてもこのような考え方は潜在しているに違

ない。と気付くと、何か漠然としたものに対する怒りを感じた。それはなんだか判らなかつた。

しかしそれは僕を生徒会活動と言うものに引きつけておくには充分だった。とにかく僕を含む多くの高校生達の退廃(僕はそう思う)した精神は一体何によってなされているのか知れたかったのだ。もちろん勉強やクラブ活動への影響は大きかった。時間的な面・精神的な面・全て影響した。しかし生徒会活動は勉強やクラブからのマイナス面を補い、より多くのものを僕に与えてくれた。これは確信して言えることである。

——お前えはもの好きだなア

——少しは勉強しろよ。生徒会気違い。

——あんまり道草食ってるなよおい。

——すきだなアまったく。

——いいのかい。そんなことに夢中になっていて。

——俺達の夢中になるのはそんなものじゃあないはずだよ。勉強だよ。ペンキョウオ。

——そんなに特権意識を持ちたいのか。

——生徒会も大切だろうけど……。何か忘れてはいないか？

——お前の気持判かんないよ。

——お前も大変だな。とにかくガンバレヨ。へへ……。今そんなことやっちゃって、しょうがないじゃないか。要するに大学さ、ダイガクだよ。

——特権意識を持つにも苦勞すんだナ。え？ フッフ……。――

——毎日毎日、生徒会室で何やってんだ。くだらない。

——無駄な事だぞ。やめちゃえやめちゃえ。

——セイトカイってそんなに面白いもんかい？

——生徒会は何やってんだ。セイトカイは。

——お前、毎日学校へ何しに来てんだい。生徒会か。アッハハハ……。

——セイトカイなんかやめちまえ。セイトカイなんかくそくらえだ。

生徒会と言うものを客観的に見るだけの余裕もないまま、自分の欠点や次々と暴露されることに、ただただあわてふためき、それを補い足しようとしたことだけの前期の僕の生徒会活動は終わろうとしていた。生徒会の為には何一つとしてやらなかったし、反対に生徒会に対する認識不足から多くの人に迷惑をかけ、いろいろな問題を投げかけてしまった僕である。やりきれない気持ちだった。何かを忘れてきてしまったような気がした。そこへ次期会長へ立候補しないかとのある人の勧めがあった。僕は動揺した。困惑した。ある委員長からは、「これだけ生徒会を掻き回したんだから跡始末をする意味においても会長になるのは当然」と言われた。掻き回したつもりは毛頭なかったが、何か心にひっかかるものがあった。ますます思い悩んだ。もっともって生徒会と言うものの本質を見極めたいと思ったあの打算的な人間の成長に生徒会を利用したいとも考えた。しかしまた勉強からの逃避行為にもなりやしないかと言う心配もあった。

少しは勉強をしなければならぬ。またその反面、今まで自分なりに考えてきた生徒会の姿を自分自身で築きあげてみたという気もしていた。生徒会と言うものを客観的に見れる自信もあった。活動の中で自分自身を見失わない自信も多少ではあるが、あるにはあった。ただ、僕に会長として人を引っばってゆく力があるかどうか。それが一番大きな問題であるはずなのに、それが一番自信のないものであった。本当に悩んだ。僕が会長をやってほかの人は一体どう思うだろうか。のほせあがつてるヤツだなどと思われはしないだろうか。かなどとくだらない事まで真剣に考えていたのだ。

会長への立候補の心を決定的にしたのは、現代の高校生の精神活動を脅かしているものが一体何であるか、それを知りたいと言うことと全国的な生徒会活動の衰退は一体何を意味するのかを究明したいと言うことであった。もちろん不安はあった。しかしその不安は初めて生徒会活動へ飛び込んだ時とは別のものだった。

当時の僕の日記には次のように記されている。

「僕はこの半年の間、数々の失敗を犯してきた。そしてまたその失敗を繰り返そうとしているのではないか。後悔しないか。しないと断言できるかいやできない。しかし後悔してもよい。その後悔は多分会長をやらなかった時の後悔よりも小さいものであろう。

それでは自分を偽ってはいないか判らない。どちらが自分を偽ることになるのか判らない。しかし悪い。不安だ。悪い……」

とにかく会長に就任してしまったのである。もういい加減な言動はできない。完璧な学校生活を送ってやろう。そう決心した。真の自治活動を確立すること。それが僕の基本的な方針だった。だがそ

の方針はすでに碎かれてしまった。生徒会を客観的に見ることでできる自信は少しはあるが、あったのだが、少しでは余りにも不十分すぎたのだ。僕の胸の中にはいろいろな構想が渦巻いていたのだが、それが余りにも松高の現状から、かけ離れ過ぎていたことを痛烈に味わった。これは僕の勉強不足・認識不足・現状分析の不足からくるものにほかならなかった。僕の考えが甘かったのだ。しかし僕にはそれが判らなかった。余裕も何もなかった。とにかく何でも新しいことを試みた。冷静さを失っていた。ノイローゼに陥ったこともしばしばあった。事務的な仕事の負担もこれに「そう拍車をかけた。自信を失っていった、人間関係の難しさも痛感した。気が付いた時にはもう残りの任期はわずかだったのだ。生徒会活動に対する基礎知識の乏しさが致命的だったのである。

僕は生徒会長をやったことに関しては後悔していない。だがその間何も出来なかったことに対しては大いに心残りがしてならない。

次に愚者の愚考を……。

我々は一体何の必要から勉強しているのであろうか。これは難しい問題である。しかしある人に言わせればやさしい問題である。

「受験の為」と躊躇なく答える。確かにそれも一つの「勉強」の目的であろう。既成の知識をむさぼり、どれだけ憶えているかをテストされ……。これが現実であり現実即して考えるならば「勉強」の目的はこれだけで充分である。しかしその目的が決定されている現実果して絶対に間違いない世界なのであろうか。いやいやそうではない。現実はいくまで現実であり、絶対的なものではない。

常に矛盾だらけのものが現実なのである。これは誰もが認めるところであろう。だが、その矛盾だらけの現実が要求する「勉強」の目的は何の疑いもなく受け入れられている。彼らの言うことには、「それが現実だからしかたがない」からである。しがし要求して来る現実を形づくっているのは一体誰なのか。それは過去において現実を学んだ人間達である。一分後には現実とはや現実でなくなると。過去でしかないのである。少し内容が進展しすぎてしまったが、結局ここで言いたいことは「勉強」とは現実に即した目的でなくすべきではなく、常にゆるぎない理念を持つてなすべきであると言うことである。その理念とは個人の幸福を勝ちとる為のものではなく、社会全体の為、社会発展に貢献する為と言うことである。その為には我々は「勉強」をするのであって、良い大学、良い会社に入る為ではない。現実社会の要求にこたえる為ではない。

生徒会活動の全国的な衰退と言うのもこのように「勉強」の目的をすり変えられているところから来るのではなからうか。入試の為の勉強なら生徒会などは必要ない。生徒会活動などをやっていたらまさに人生における道草である。しかし勉強とは入試の為のものではない。現実がどうであらうと勉強をする目的は入試ではないのである。高校や大学で勉強するのは「社会発展に貢献する」為の手段であって目的ではない。従ってその大きな目的を達成する為には高校や大学に入らなくとも良いかもしれない。目的を達成させる手段は一つだけではないのであるから……。

生徒会活動を頭から軽蔑する者がいる。そう言う者に限って勉強をする目的を入試の為であると決めつけているのである。生徒会活

編集後記

動もクラブ活動も勉強ではないか。既成の知識を詰め込むことを否定しようと言っているのではない。それも大切なことであろう。しかしそれで充分なわけではない。それを活用し、真実と虚偽とを見極めなければならぬのである。このように社会が複雑になってくると、何が真実であるかを知ることが常非に難しいことである。しかし難しいからと言ってそれから逃避してはならない真実を知り、虚偽を発見し、それを訂正し発展させてゆくのは我々次の時代をしよって立つ若人の義務ではないか。その義務を果たす為には与えられた既成の知識だけではなく、自分自身で考えなければならぬのである。責任をもって充分に納得のゆくまで考えなければならぬのである。その場が生徒会であることは言うまでもない。またクラブ活動でもある。よく「生徒会は一切何をやっているのだ」と言う声を聞く。その答えはそう言っている自分が一切何をやっているのかをみればすぐに得られる。

生徒会とは役員や委員のものではない。全体の生徒から分離したものでないのである。夏の民主主義を学ぶのは既成の知識だけを詰め込むことであろうか、個人の幸福だけを追求し利己主義な人間になり下つても良いのであろうか。

とにかく我々は教室で学んだ知識を基礎として社会を発展せしめる人間にならなければならない。現実の要求する規格品ではない人間を……。

これが僕の一年を通じて生徒会活動に夢中になって感じたこと、考えたことの一部である。本当によい思い出になるであらう。もちろん思い出を作る為の生徒会活動ではないが……。

今年の「る・くる」如何でしたか。委員会としては精一杯の努力をしました。しかし各所に御不満な点がある事と思いますが、どうかお許し下さい。ほとんど毎年の様にこの仕事の責任者が頭をいためるのは、応募原稿の少ない事です。今年もその御多分にもれずいや、かってないくらいにたりませんでしたので。ちょっと薄くなつてしまいました。

今年も昨年と同じく「る・くる」の形式についてずいぶんもめました。或る男子曰く「なにせ生徒会誌ですよ。生徒会というところに気をつけてほしいですね。」或る女子曰く「生徒会誌だからこそ生徒にすかれるようなものにするんじゃないの。全然わかってないのね。」とまあこんな具合でした。何日も話しあったあけく前者をとりました。皆さんはどちらがよいでしょうか。御意見をお聞かせ下さい。

この努力の三ヶ月間で最も残念に思うことは、先生方の原稿が間に合わなかった事と座談会の原稿がテ・ブ・レ・コーダーの事故でついに完成ならなかった事です。出席者の皆さん、又全校の皆さん、まことに申し訳ありません。ほんとに、ほんとに……最後に、応募下さった皆さん、各方面に御協力下さった皆さん、どうもありがとうございました。委員の皆さんも御苦労様。

みんなで楽しく読んで下さいね。

斎藤記

